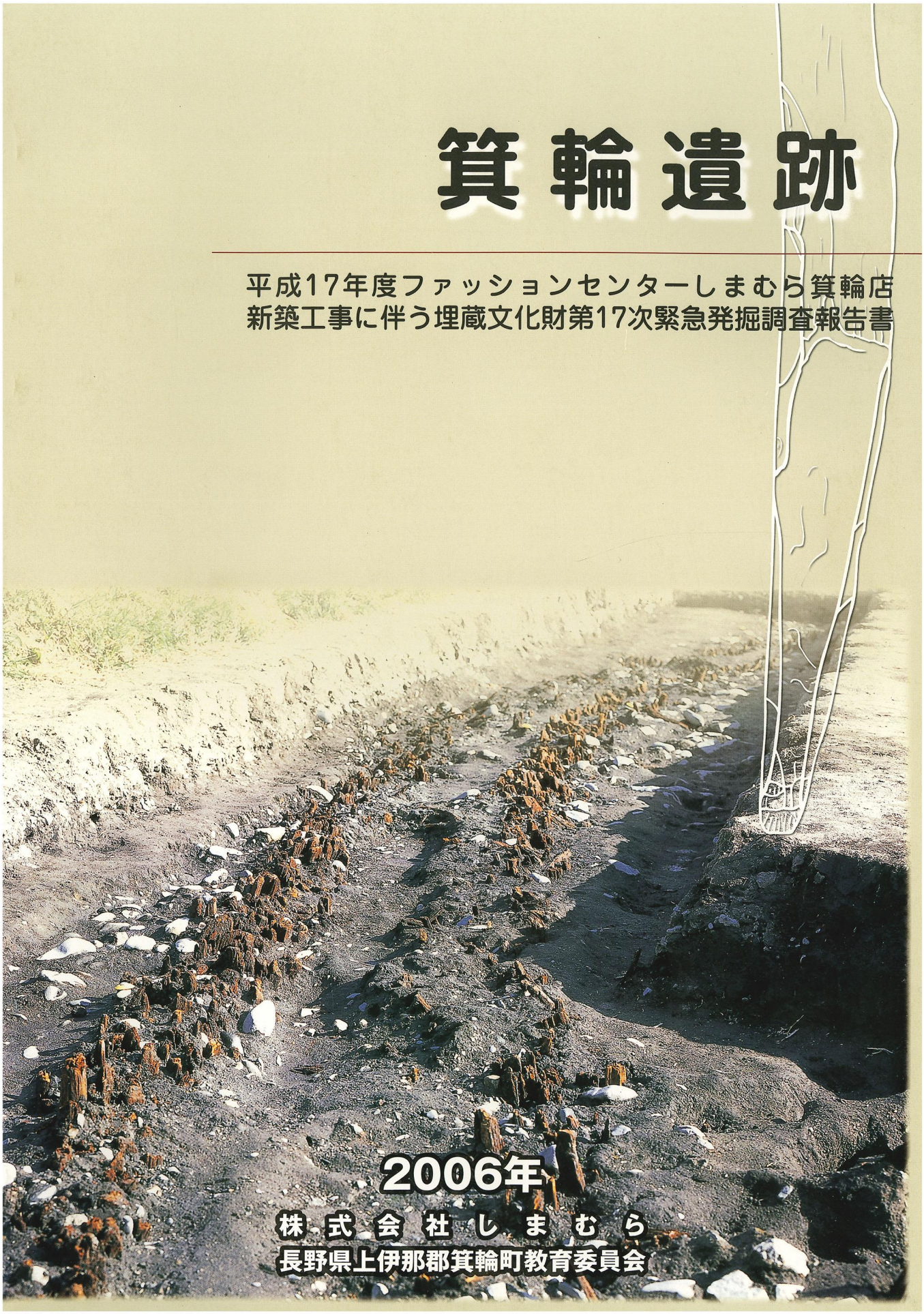
# 箕輪遺跡

平成17年度ファッションセンターしまむら箕輪店
新築工事に伴う埋蔵文化財第17次緊急発掘調査報告書

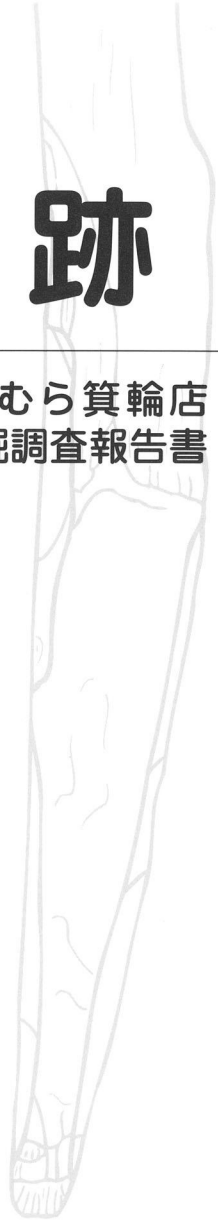


2006年

株式会社しまむら
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

# 箕輪遺跡

平成17年度ファッションセンターしまむら箕輪店
新築工事に伴う埋蔵文化財第17次緊急発掘調査報告書



2006年

株式会社しまむら
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

水路状遺構全景（上空より）

打ち込まれた木杭（水路の袖）

水路の断面

# 序

箕輪町は、伊那谷の北部に位置し、東西には南北に連なる山々が望め、それらから流れ出す中小河川の清らかな水はやがて諏訪湖を源流とする天竜川にそそがれ、山紫水明が織り成す美しい郷土であります。人々は、この地の生み出す自然の恵みを求めて、数万年もの太古から暮らし始め、幾年もの時の中でその時代々に生きた先人達の努力により今日の町の発展へと繋がってきました。町内にはまだ、彼らが残した今に伝える多くの文化遺産があります。

箕輪遺跡は、上伊那郡下において唯一確認されている低湿地帯にみられる大農耕遺跡であります。この遺跡が注目されましたのは、昭和26年に始まった大規模な土地改良工事中に、稲作に使われた木製農具や多量の土器の出土と共に、記録にない水田跡の発見によるものであります。この事実にいち早く着目した郷土史研究家を中心とした多くの人々により、地道な遺物の採取と調査がなされ、その全貌が明らかとなり世に知られることとなりました。これは、郷土の歴史解明に一つの光をもたらしたものであり、諸先輩方の多大な努力なくしては語ることのできないことであります。

町教育委員会が実施した本遺跡の緊急発掘調査は、昭和55年を皮切りに今回で17次を数えることになりました。また、平成12、13年に行われた長野県埋蔵文化財センターのほか、遺跡が広がる南箕輪村地籍でも同教育委員会による調査が行われています。これまでの調査の積み重ねによって多くの成果を上げており、徐々に遺跡のなぞが解き明かされつつあります。

調査結果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、本書を広く活用していただければ幸いと存じます。

今回の遺跡の記録保存事業に関しましては、文化財保護に対します株式会社しまむら様のご理解と多大なるご協力によるものであり、本書の刊行をもちまして改めて感謝の意を表するものであります。また、各方面でご指導ご助言をいただいた諸機関の方々や、ご協力いただきました地域並びに調査関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長　小　林　通　昭

# 例　　言

1　本書は、平成17年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町893番地1他に所在する、箕輪遺跡の第17次緊急発掘調査報告書である。

2　遺跡の発掘調査及び整理作業等の記録保存業務は、「株式会社しまむら」より委託を受けて、箕輪町教育委員会が行った。

3　本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－大串久子、根橋とし子

遺構図の整理・トレース－大串久子、白鳥弘子、中村孝子、根橋とし子

遺物の実測・拓本・トレース－大串久子、白鳥弘子、向山英人

挿図作成－大串久子、白鳥弘子、根橋とし子

写真撮影・図版作成－赤松　茂、根橋とし子

4　本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子が行った。

5　本書の編集は、赤松　茂、大串久子、白鳥弘子、根橋とし子が行った。

6　出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。

7　調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

個人－市川隆之、内田健一、河西克造、小池喜志子、広田和穂、友松瑞鳳、福島　永

機関－㈶長野県埋蔵文化財センター、三日町区、南箕輪村教育委員会

# 凡　　例

1　挿図

・挿図の縮尺は、各図ごとの右下に表記（スケールを有するものも含む）した。

・遺物実測図は、以下の縮尺に統一した。

木器実測図－1：4　　金属器・土製品・石器・石果類実測図－1：2

・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、各図ごとに凡例を設けているので参照されたい。

2　土層及び遺物観察

・土層及び土製器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。

・出土木器、金属器、石果類、木器観察表の重量の単位はグラム（g）で表している。法量はすべて最大値である。また、現存する数値は「(　)」で、「－」は計測不能を表している。木杭の重量は含水した値を表す。

3　遺物写真図版

・各写真の数字は、挿図における遺物番号を表している。

# 本　文　目　次

巻頭カラー図版
序
例　言
凡　例
本文目次
挿図目次・表目次・図版目次・遺物図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査概要と体制……2
　第３節　調査日誌……3

第Ⅱ章　遺跡の環境……5
　第１節　地形と地質……5
　第２節　歴史環境……7

第Ⅲ章　調査結果……10
　第１節　調査の方法と結果概要……10
　第２節　土層堆積状況……11

第Ⅳ章　遺構と遺物……14
　第１節　検出遺構……14
　第２節　試掘調査結果……23
　第３節　遺物……26

第Ⅴ章　総括……41

報告書抄録

# 挿　図　目　次

第１図　調査位置図
第２図　周辺遺跡分布図
第３図　調査区設定図
第４図　調査区・トレンチ設定図
第５図　１トレンチ土層断面図
第６図　１面遺構検出状況全体図
第７図　１面溝状遺構・耕作関連遺構実測図
第８図　２面遺構検出状況全体図
第９図　水路状遺構平面図、土層断面図
第10図　１号竪穴状遺構平面図、土層断面図
第11図　試掘調査遺構平面図、トレンチ土層断面図
第12図　出土金属器、土製品、石器、石果類実測図
第13図　出土木器実測図１
第14図　出土木器実測図２
第15図　出土木器実測図３
第16図　出土木器実測図４
第17図　出土木器実測図５
第18図　出土木器実測図６
第19図　出土木器実測図７
第20図　出土木器実測図８
第21図　出土木器実測図９
第22図　出土木器実測図10
第23図　出土木器実測図11
第24図　箕輪遺跡平面図（昭和29年度調整）

# 表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　出土金属器観察表
第３表　出土土製品観察表
第４表　出土石器観察表
第５表　出土石果類観察表
第６表　出土木器観察表

# 遺物図版目次

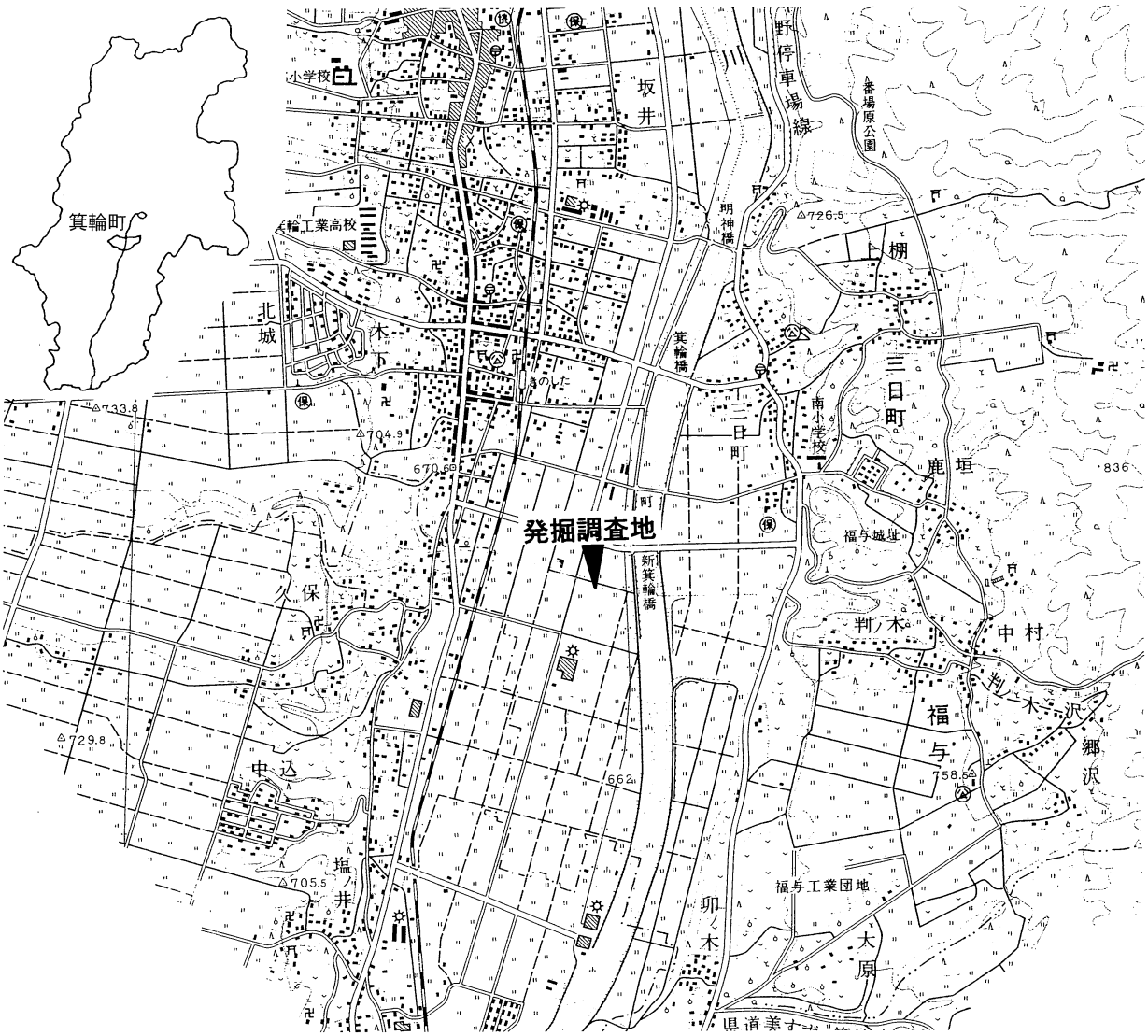
図版１　出土土器類１　出土土器類２
図版２　出土土器類３　出土土器類４
図版３　出土金属器、土製品、石器、石果類
図版４　出土木器１
図版５　出土木器２
図版６　出土木器３
図版７　出土木器４

# 第Ⅰ章　発掘調査の概要

## 第１節　調査に至る経過

箕輪遺跡は、縄文時代の終末期に本国にもたらされた稲作による農耕文化が全国に波及し、各地域で独自の文化圏を形成し始めた弥生時代前期の後半段階に、その初源を探ることができる。しかし、遺跡からはそれより遥か以前、縄文時代早期からの遺物も多数発見されており、一帯が天竜川の氾濫原であるにもかかわらず、古くから人々の暮らしに欠かせない重要なエリアであったことが推測される。特に中・近世においては、組織的な耕地開発が進められ、幾多の水害をも克服し比較的安定した稲作経営がなされてきた。それは、時代が変った今日まで代々受け継がれてきた。一帯は、町の発展の歴史に関わる最も重要な場所の一つに位置づけられる。

現在は、戦後に行われた耕地整理を経て新たな水田地帯となっているが、ほかの産業の発展と共に人口増加も進み、宅地化とそれに伴う道路整備も進んできている。時に、遺跡中央を南北に縦走する国道153号線伊那バイパスが、㈶長野県埋蔵文化財センターによる緊急発掘調査を経て、平成15年秋に三日町地籍から南箕輪村との境界付近での一部供用開始となった。そしてそれを契機に、宅地化とともに道




第１図　調査位置図（1：20,000）

路に接する広大な農地が、商業地として地域内外から注目を浴びることとなった。

今回、南箕輪村塩ノ井に店舗を構える「ファッションセンターしまむら」が新たな事業展開を目指し、バイパスと町公共下水道終末処理施設「浄水苑」との間の三日町地籍において3,621㎡を用地とする、新店舗の出店計画が進められた。建設用地が本遺跡包蔵地に当たる事から、平成15年より、開発計画の事業担当部局から具体的な開発計画の提示があり、係る文化財の保護をめぐって町教育委員会との間で事前協議を重ねてきた。同年12月、長野県教育委員会を交えた保護協議を実施した。その結果、事業主体者である「株式会社しまむら」より、係る文化財の保護にご理解をいただき、店舗建設工事に先立って発掘調査による記録保存を行うことと合わせて、同社が調査業務を町教育委員会に委託することで合意に達し、全面的な協力をいただくことになった。

なお、当初は平成16年度に事業実施が計画されたが、同社側からの出店時期変更の申し入れにより再度協議を行った結果、平成17年４月１日付で委託契約を結び、同11日より業務を開始し平成18年3月17日の委託業務完了をもって本書の刊行に至った。

## 第２節　調査概要と体制

1　遺　跡　名　　箕輪遺跡（みのわいせき）

2　所　在　地　　長野県上伊那郡箕輪町大字三日町893－1番地他

3　事業期間　　平成17年4月11日～18年3月17日
（発掘調査　同年4月11日～8月5日）
（整理作業　同年8月6日～18年3月17日）

4　事　務　局

教　育　長　　小林　通昭
生涯学習課長　　平井　克則
同文化財係主幹　　赤松　　茂
同副主幹　　有賀　一治
同副主幹　　柴　　秀毅
臨時職員　　中村　孝子（平成17年9月30日まで）

5　調　査　団

調査団長　　小林　通昭
調査副団長　　平井　克則
調査担当者　　赤松　　茂
調　査　員　　根橋とし子
調査団員　　泉沢徳三郎　大串　　進　大串　久子(整理作業)　岡田　和弘　岡田　照子
小川　陽三　小木曽俊一(整理作業)　春日　誠子　小松　峰人
白鳥　弘子(整理作業)　征矢　三郎　田中　忠男　中村　孝子　藤沢　具明
藤沢達雄　堀　五百治　松崎　仲子　向山　英人　吉川　正剛　山崎　朝男
横内　紀八（※50音順）

## 第３節　調査日誌

４月18日（月）　調査地にトレンチを４本設定する。
トレンチは東から１～４区とする。

４月20日（水）　重機にて表土剥ぎ開始。ハウスとトイレを設置し、機材を搬入する。

４月21日（木）　発掘調査団の結団式を行い作業を開始。重機にて１～３区の表土剥ぎを行い、その後手作業にて上面確認。

４月22日（金）　４区を重機にて表土剥ぎ。その後、上面確認にて内耳土器・灯明皿・磁器・モモの実等が出土する。

４月25日（月）　１区で砂礫に被覆される畝状整地遺構を確認。遺構確認１面と呼称する。同様の遺構は国道153号線伊那バイパスの調査でも検出されている。また、部分的に、下部遺構面に伴う木杭を確認する。（財）県埋蔵文化財センターより調査研究員が視察に訪れる。

４月26日（火）　１～４区の上面確認。畝状遺構に堆積する砂礫を取り除く。

４月27日（水）　１・２区の北側の畝状整地遺構を清掃し、写真撮影を行う。４区の上面確認。

４月28日（木）　３・４区の北側の畝状整地遺構を清掃し、写真撮影を行う。１区北側の平面測量。西側の試掘調査区に手掘りで２本のトレンチを開ける。

５月６日（金）　１区の平面測量とレベルの記録作業。２トレンチの上面確認。雨天のため午後は作業を中止する。

５月９日（月）　１区の平面測量を終了。２区の平面測量。４区・２トレンチの上面確認。溝状遺構を確認する。

５月10日（火）　４区の上面確認。１区の溝状遺構を掘り下げ。出土遺物を取り上げる。３区の平面測量。

５月11日（水）　１区２面の検出開始。木杭が列状に出始める。第14・15次調査で検出した水路状遺構（以後「水路」と呼称）の続きと確認。４区までの平面測量終了。

５月12日（木）　水路の杭列検出作業継続。

５月13日（金）　雨天中止。

５月16日（月）　水路の検出作業継続。町教委教育長及び㈶県埋蔵文化財センター調査研究員が現地視察。

５月17日（火）　水路の検出作業継続。１区北西部を拡張し杭列の検出。タイプの異なる杭列を検出。

５月18日（水）　２区の畝状整地遺構を削り、２面の検出開始。遺構上面を見極めるため、サブトレンチを開ける。出土した遺物の位置を記録する。

５月19日（木）　２区の２面の検出作業継続。確認面より木片を確認。

5月20日(金)　2・3区の2面の検出作業継続。
サブトレンチを掘削。

5月23日(月)　3区で粘土質シルト層まで掘り下げる。層直上に近世遺物と中世末遺物が出土。3区の平面測量。

5月24日(火)　4区北側の掘り下げ。旧水田の耕作面は層に厚さの差がある。4区南側の平面測量。試掘調査区2・3トレンチの上面確認。

5月25日(水)　4区の溝状遺構の写真撮影と平面測量。1トレンチの断面測量と土層記録。3トレンチの掘り下げ。

5月26日(木)　2・3区北壁の断面測量。3トレンチの掘り下げ。4～6トレンチを重機にて開け、上面確認。5トレンチ東では弥生土器が出土。3トレンチで溝状遺構を確認する。

5月27日(金)　～6月2日（木）作業休止。

6月3日(金)　調査地の空撮。5・6トレンチの上面確認。町文化財保護審議会会長が視察に訪れる。

6月10日(金)　箕輪北小学校の児童60名が見学に来る。6トレンチの上面確認作業。

6月13日(月)　2～6トレンチの断面測量と土層観察。1区の掘り下げ。㈶県埋蔵文化財センターより調査研究員が視察に訪れる。

6月14日(火)　2～6トレンチの写真撮影準備。平面測量を行う。

6月15日(水)　水路の杭列を測量開始。

6月23日(木)　2・3区の西壁断面測量。見学会の準備を行う。

6月24日(金)　見学会準備。2・3区の断面測量を終了。機材整理をする。

6月25日(土)　現地見学会を開催。30数人が見学に訪れる。

6月27日(月)　雨天のため室内作業。

6月28日(火)　水路にサブトレンチを3ヵ所設定し掘削。
断面測量準備。一部機材撤収。

6月29日(水)　雨天のため室内作業。

6月30日(木)　水路のサブトレンチ掘削。

6月1日(金)・4日（月）雨天のため室内作業。

7月5日(火)　1区の西壁断面測量を終わる。サブトレンチの写真撮影と断面測量。

7月6日(水)　1～3トレンチの土層記録。機材を撤収する。

8月5日(金)　埋め戻しを完了し、調査終了。

# 第Ⅱ章　遺跡の環境

## 第１節　地形と地質

箕輪遺跡のある箕輪町は、伊那盆地の北部に属している。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼ばれている。それは次のような理由から来ている。

伊那盆地は、中央・南の両アルプスに囲まれて南北に細長い形をしているが、長野盆地や松本盆地などと比べると盆地内の扇状地堆積物の厚さが薄く、段丘崖によって山地変換線から盆地中央部の盆地底まで階段状の地形をしている。その盆地底から、天竜川両岸の山までは、まさに「伊那谷」というべき独特の景観をしている。

以前は伊那盆地を作りあげている盆地底まで続く階段状の地形は、天竜川によって造られた河岸段丘と考えられていたが、現在では地形の研究が進み、河岸段丘ばかりではなく、活断層の影響で盆地の中央部まで階段状の段丘崖が続いている構造盆地であることがわかってきた。

上空より遺跡地を望む（1：5,000　平成12年撮影）

伊那盆地の盆地内部には伊那谷中央断層と呼ばれる断層があり、中央低地帯と呼ばれる盆地底を形成している。天竜川はこの中央低地帯を流下していて沖積低地を作っている。箕輪町を含む上伊那北部では、天竜川本来の段丘はこの中央低地帯に沿って形成されていて、最低位段丘には天竜川によって運搬されたとみられる円礫層が載っている。この面は２万年前の最終氷期最寒冷期の氾濫面に相当すると考えられる。

天竜川の東は「竜東」と呼ばれ、西は「竜西」と呼ばれているが、箕輪町は天竜川によって竜東と竜西にほぼ二分された形になっている。どちらの地域も伊那谷の他地域と同じような地形を形成しているが、竜東と竜西では地形の出来かたが違っている。

竜東では低山性の丘陵が天竜川近くまで迫り、支流による小規模な扇状地が形成されているため、比較的変化に富んだ地形をしている。

一方の竜西では扇状地が重なり合い、合成扇状地を形成しているため、広く平坦な地形が続いている。箕輪町の竜西では帯無、深沢、桑沢の各河川があるが、この流域には離水年代の異なる扇状地が連続的に重なり合っている。また、１万２千年以降には、主に支流が天竜川に合流するような場所に、「クロボク」と呼ばれる黒色腐食土層の中に広域テフラである鬼界アカホヤテフラを含んだ最新の地形面が作り出されている。

このような中にあって箕輪遺跡は竜西に属しているが、合成扇状地上ではなく天竜川による沖積低地に立地している。

この沖積低地にある箕輪遺跡は隣接している南箕輪村まで続くおよそ100ヘクタールの大遺跡として捉えられているが、遺跡の地形は天竜川の自然堤防によって、自然堤防上の微高地、自然堤防内側の氾濫原、自然堤防外側の後背湿地とに分けることができる。

自然堤防上の微高地は集落として、自然堤防の内側および後背湿地は水田として利用されていたと考えられる。

また、遺跡地一帯は、段丘下や遺跡内から湧く清水や小河川によって水が大変豊富であり、昭和27年の土地改良事業が行われるまでは、天竜川近くは広くアシ原が形成されていたといわれている。事実、今回の発掘調査地においても現地表面から深さ２ｍほどの下に、アシとみられる植物遺体が圧縮された状態で見つかっている。

今回の調査地は、自然堤防内側の氾濫原に立地しているが、遺跡近くに「ふる川」と呼ばれる天竜川の旧河道が推定されている。遺跡地の堆積土層は、沼地化によるシルト層と天竜川によるものと思われる砂礫層が重なり合っているのが観察できる。場所によっては何層にも重なり合っていて、「暴れ天竜」と呼ばれた天竜川の氾濫のすごさを物語っている。

現在遺跡地は土地改良によって、均一的に平坦な地形が広がっているに過ぎないが、「曽根田（ソネ＝長く低く続く嶺)」、「穴田」などと呼ばれる小字名や発掘調査地内の土層観察により、もっと起伏に富んだ地形をしていたことがわかる。

いずれにせよ、上伊那を含めた伊那盆地の地形・地質の研究は進んできているが、箕輪町内において今日まで広域的な地質調査や地形研究が行われた例はあまり無く、まだ未解明の部分が多いのが事実である。特に地質調査においては、埋蔵文化財調査や公共工事をはじめとした各建設工事のさいに行われるボーリング調査によって一端をうかがえるだけで、また、それら全部を把握出来ていないのが現状で

あり、箕輪遺跡についてもその例に漏れない。

遺跡調査地は、国道153号線のバイパス建設にともない、大型店舗の出店など遺跡地内の開発がさらに加速するのは容易に推測できる。遺跡内容の解明のためにも、遺跡地の地形および地質に対する研究も進めていかなくてはいけないだろう。それには箕輪遺跡を含めた箕輪町内の広域的な調査が望まれるものであり、断片的に行われている各調査の調査結果を取りまとめるためにも関係機関との連携が不可欠である。

## 第２節　歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など豊かな水源に恵まれ、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。また、町内には先人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。

箕輪遺跡は昭和27年より３年間に亘り行われた土地改良事業によってその存在が確認された。土地改良事業中ということもあり、発掘調査の実施までには至らなかったが、その状況は箕輪史研究会によって克明に記録され、多くの出土遺物は地元郷土史家によって採取されている。今日、本遺跡の存在はそのほか、多くの研究者の着実な努力なくしては語れないところである。

遺跡地は大清水・小清水・苦谷・馬場・御室田・鍛冶屋垣外・城安寺・穴田・渋田・曾根田・久保下等の多くの小字によって区分される。出土遺物は縄文中・後・晩期土器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中・近世陶磁器まで時代の幅が見られる。また、田舟、田下駄、木製鍬・鋤などの農耕具の他、矢板や数万本に達すると思われる木杭が出土しており、水田経営を裏付けるものと言えよう。さらに注目されるのは、大清水地籍から出土した木製人形・馬形・木串や御室田地籍より多量に出土した高杯を中心とする弥生土器、土師器などで、水田経営に関係するであろう祭祀的遺構の存在が明らかに予測された。

以後の調査状況は、30年後の昭和55～57年に亘って、国道153号線箕輪バイパス工事に伴う発掘調査が実施された。特に昭和57年における第３次調査では、水田址とそれに伴う道路を確認することができた。水田は方形で、木杭を打ち込んで畦畔を造っており、水田の出入口と思われる施設の存在も確認された。また、昭和58年には、南箕輪村との境にある田中城跡の発掘調査を行ったが構築規模を想定できるような遺構の存在は確認されなかった。平成２年には、木下区公民館建設に伴う発掘調査が国道バイパス153号線隣接地の大清水地籍において行われた。過去において多くの土器類、木製人形・馬形・木串が出土した箇所ではあったが、土層堆積状況から見ると低位段丘下であるため、全般的に天竜川の洪水等の繰り返しによる比較的不安定な土地条件であり、遺物および遺構の検出はなかった。また同年、公共下水道事業終末処理場建設に先立つ城安寺地籍の発掘調査では、木杭列を伴う水田遺構の検出と現堤防の築かれる以前の天竜川に隣接する一帯における稲作の実態が確認された。また、その下部の水田面からは、古墳時代後期の壷を伴う水路状遺構も検出している。

平成４年には、遺跡で一番南に位置する南箕輪村田中地籍において、約7,000㎡にも及ぶ面積の発掘が行われ、南北約80mに亘り5,000本もの杭が打ち込まれている水路状遺構や暗渠施設などが検出された。平成４・５年に行われた主要地方道伊那辰野（停）線と、国道バイパス153号線とを結ぶ「県道美篶－箕輪

第２図　周辺遺跡分布図（１：20,000）

バイパス建設工事」に伴う発掘調査では、自然堤防によって分離された後背湿地帯において、およそ2,000本もの杭を要した水路状遺構が検出されており、中・近世の水田経営の実態が明らかになった。

平成12～15年には県埋蔵文化財センターに依頼して国道153号線バイパスの発掘調査が行われた。調査の結果、①これまで箕輪遺跡内に存在が想定されながらも具体的な場所が確認できなかった集落遺構を具体的に明らかにし、弥生中期後半、後期初頭、古墳時代後期の３時期の住居址を検出した。②箕輪遺跡内では古墳時代には河道跡低地を中心に水田化されていたが、河道跡が埋没するに従って、微細な凹凸地形の高低差が減少し、水田域も広がってくることが明らかになった。③古墳時代の水田跡の木芯畦跡はこれまで長野県内で発見されている水田趾と同じ構造であることも確認された。このように着実に箕輪遺跡の調査が進んできてはいるものの課題も多く、今後の調査に期待していきたい。

次に、本遺跡の周辺遺跡についてであるが、西方の段丘上に連なる遺跡群と、北方の段丘下扇状地上に所在する遺跡群がみられる。発掘例を中心に、これらを概観してみる。まず前者についてであるが、北より上の林（84）、北城（85）、南城（86）、猿楽（87）と続き、過去に発掘調査が行われ、縄文、弥生、平

第１表　周辺遺跡一覧表

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | | | | | | | | 立地 | 地目 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 旧 | 縄 | 弥 | 古 | 奈 | 平 | 中 | 近 | | | |
| **98** | **箕輪** | **木下・三日町** | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | **平地** | **宅地・畑** | 昭和55～57、平成2・4・5・8・12・14・15年調査 |
| 219 | 田中城 | 三日町 | | | | | | | ○ | | 平地 | 田 | 昭58調査　　町史跡 |
| 84 | 上の林 | 木下 | | ○ | ○ | | | ○ | | | 段丘突端 | 宅地 | 昭55～57・60、平2・4調査 |
| 85 | 北城 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | 段丘突端 | 宅地 | 昭47調査　城跡含む |
| 86 | 南城 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | 段丘突端 | 宅地・畑・田 | 昭52調査 |
| 211 | 箕輪城 | 〃 | | | | | | | ○ | | 段丘突端 | 墓地・林 | 町史跡 |
| 87 | 猿楽 | 〃 | | | ○ | | | ○ | | | 段丘突端 | 宅地・畑 | 昭49調査 |
| 88 | 鳳輦路 | 〃 | | ○ | | | | ○ | | | 段丘突端 | 宅地・畑 | |
| 89 | 天王 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | 段丘突端 | 宅地・畑 | |
| 90 | 西垣外 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | | 扇央 | 宅地・畑 | |
| 91 | 芝宮 | 〃 | | | | | | ○ | | | 扇央 | 宅地・畑 | |
| 92 | 上町 | 〃 | | | ○ | | | ○ | | | 扇央 | 宅地 | |
| 93 | 中町 | 〃 | | | | ○ | | ○ | ○ | | 扇央 | 宅地 | |
| 94 | 下町 | 〃 | | ○ | | | | ○ | | | 扇央 | 宅地 | |
| 95 | 苦谷 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | 扇端 | 宅地・畑 | |
| 96 | 鍛冶屋垣外 | 〃 | | ○ | | ○ | | ○ | | | 扇端 | 宅地・畑 | |
| 97 | 馬場 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | 扇端 | 宅地・畑 | |
| 192 | 木下古墳 | 木下 | | | | ○ | | | | | 段丘下 | 宅地 | |
| 154 | 坂頭 | 三日町 | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | 扇頂 | 畑 | |
| 155 | 御射山 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 扇央 | 畑 | 昭54調査 |
| 156 | 今町 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | | 台地 | 畑 | |
| 157 | 二位殿坂 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | | 台地 | 畑 | |
| 158 | 上棚馬場 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | 台地 | 宅地・畑 | |
| 159 | 澄心寺下 | 〃 | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | 扇頂～央 | 田 | 昭55調査 |
| 160 | 大平出 | 〃 | | ○ | | | | ○ | | | 扇頂～央 | 畑・田 | |
| 161 | 小学校庭 | 〃 | | ○ | | | | | | | 平地 | 宅地 | |
| 205 | 天王塚古墳 | 〃 | | | | ○ | | | | | 扇央 | 畑 | 昭57調査 |
| 206 | おじょろ様古墳 | 〃 | | | | ○ | | | | | 扇央 | 畑 | |
| 163 | 鹿垣 | 福与 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 台地 | 宅地・畑 | |
| 164 | 鹿垣南 | 〃 | | | | | | ○ | | | 扇頂～央 | 宅地・畑・田 | |
| 165 | 福与城 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 段丘突端 | 畑・史跡公園 | 県史跡、城跡含む |
| 166 | 福与城東 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 扇央～端 | 宅地・畑 | |
| 167 | 判の木 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 扇央～端 | 宅地・畑 | |
| 168 | 福与中村 | 〃 | | ○ | | | | ○ | | ○ | 扇頂 | 宅地・畑 | |
| 169 | 狐垣外 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 扇頂 | 畑 | |
| 170 | 二本松 | 〃 | | ○ | | | | | | ○ | 段丘突端 | 宅地・畑 | 円海塚含む |
| 171 | 判の木南 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 扇央 | 畑・田 | |
| 172 | 北垣外 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | 段丘突端 | 宅地・畑 | |
| 173 | 卯の木 | 〃 | | ○ | | ○ | | ○ | | | 段丘突端 | 宅地・畑 | |
| 174 | 黒津原 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 段丘突端 | 畑 | |
| 175 | 上金 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | | | 段丘突端 | 畑 | 昭61調査 |
| 176 | 矢田尻 | 〃 | | ○ | | ○ | | ○ | | | 段丘突端 | 畑 | |
| 177 | 矢田 | 〃 | | ○ | ○ | | | ○ | | | 段丘突端 | 畑 | |
| 178 | 上の山 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | 段丘突端 | 畑 | |
| 179 | 福原 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | 扇央 | 宅地・畑 | 昭52調査 |
| 180 | 福与大原 | 〃 | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | 扇央 | 宅地・畑 | 昭53調査 |
| 181 | 郷沢 | 〃 | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | 扇頂～央 | 宅地・畑 | 平3調査 |
| 182 | 石仏 | 〃 | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | 扇頂 | 宅地・畑 | |
| 208 | 大塚古墳 | 〃 | | | | ○ | | | | | 扇頂 | 畑 | |

安時代の集落址の一端を探ることができた。特に、北城遺跡からは、17件に及ぶ弥生時代後期の住居址群を確認し、段丘下に広がる水田経営が行われた箕輪遺跡との関連性を大いに伺うことができた。次に後者についてであるが、段丘下には帯無川の押出しにより形成された扇状地が広がり、中でも扇央部に位置する柴宮（91）、上町（92）、中町（93）、下町（94）、渋谷（95）と続き、扇端部の鍛冶屋垣外（96）遺跡では古墳後期の須恵器の瓶を主する祭祀関連遺物がセットで出土している。

以上、本遺跡とそれを取り巻く遺跡について概観してきたが、今まで疑問視されてきた生産地と集落という関係が解明されてきたことは、箕輪町の歴史を見つめていく上で重要な折り返し点になるであろう。

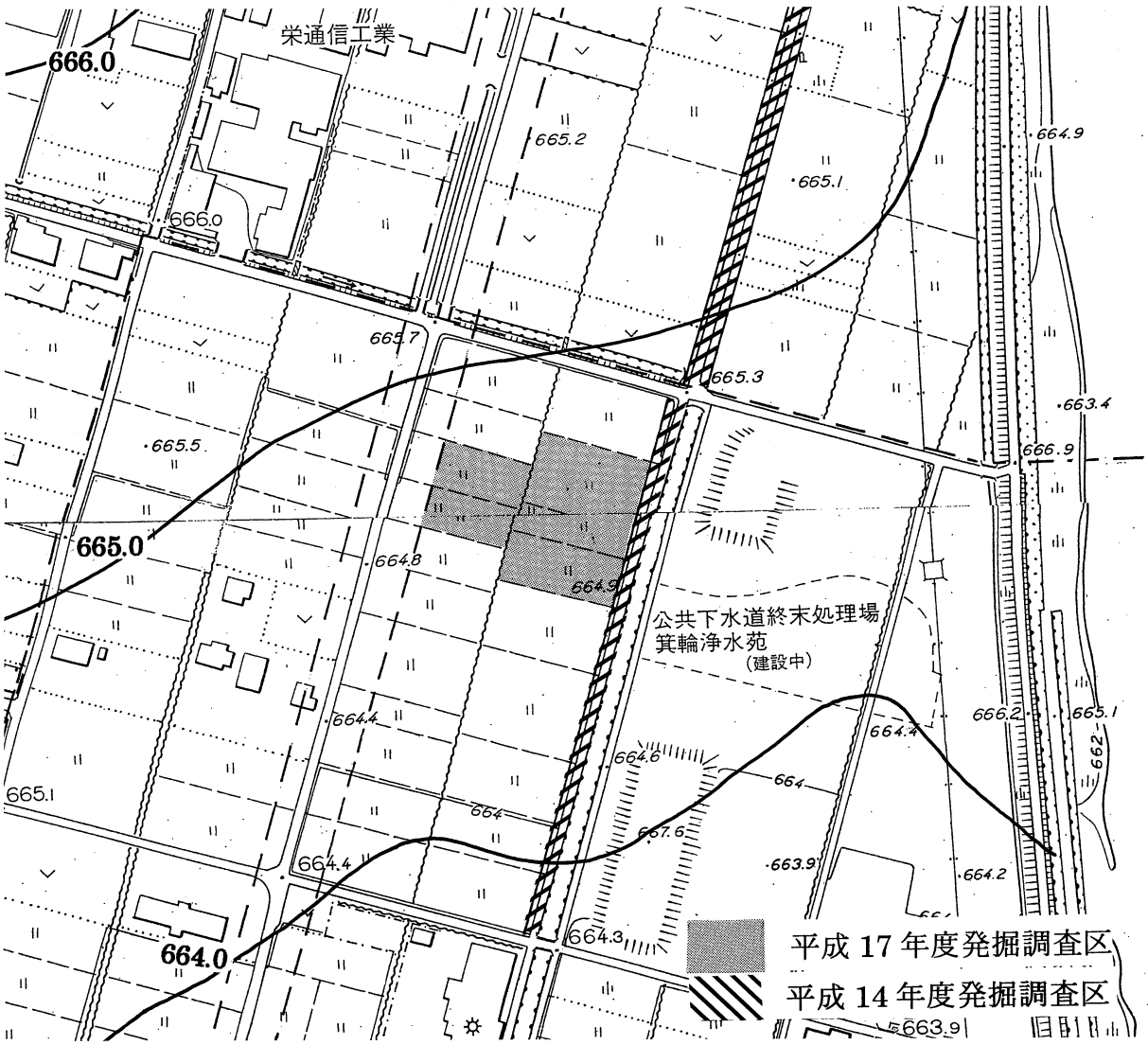
# 第Ⅲ章　調査結果

## 第１節　調査の方法と結果概要

今回の調査は、「ファッションセンターしまむら」の店舗建設に伴うもので、敷地総面積3,621㎡の範囲において主に店舗延べ床面積1,371㎡がその対象であった。事前に確認した建物の基礎部は、南北方向におよそ47mに３～４ヶ所、東西方向におよそ31mに４ヵ所設けられ、基礎底面は予測される遺構の破壊が余儀なくされるため、当該個所を重点に調査による記録保存を実施することとし、基礎工事による掘削がされない残地は、現況を変えずにむしろ盛土が施されるので、むしろ遺構保護のため調査対象から除外した。

調査区の設定は、本遺跡が水田址を主とする特異な性格であるので、基礎部をピンポイント的に調査することはかえって困難であると判断し、南北方向におよそ10m間隔に２m幅でトレンチ状の調査区４ヵ所を設定し、東側から１～４区とした。また、４区の西側に隣接して、土層堆積状況を確認するトレンチを設けた。

遺構の検出作業は、まず重機によるトレンチ掘削と各区の表土剥ぎ、手作業による遺構上面確認作業、




第３図　調査区設定図（１：2,500）

各検出遺構の掘り、土層堆積状況・検出遺構平面等の測量及び写真撮影による記録作業、遺物の取り上げの手順で行った。また、ベンチマークXは、調査地と町道503号線との境界柱に設定し、測量による記録作業の標高を割り出した。

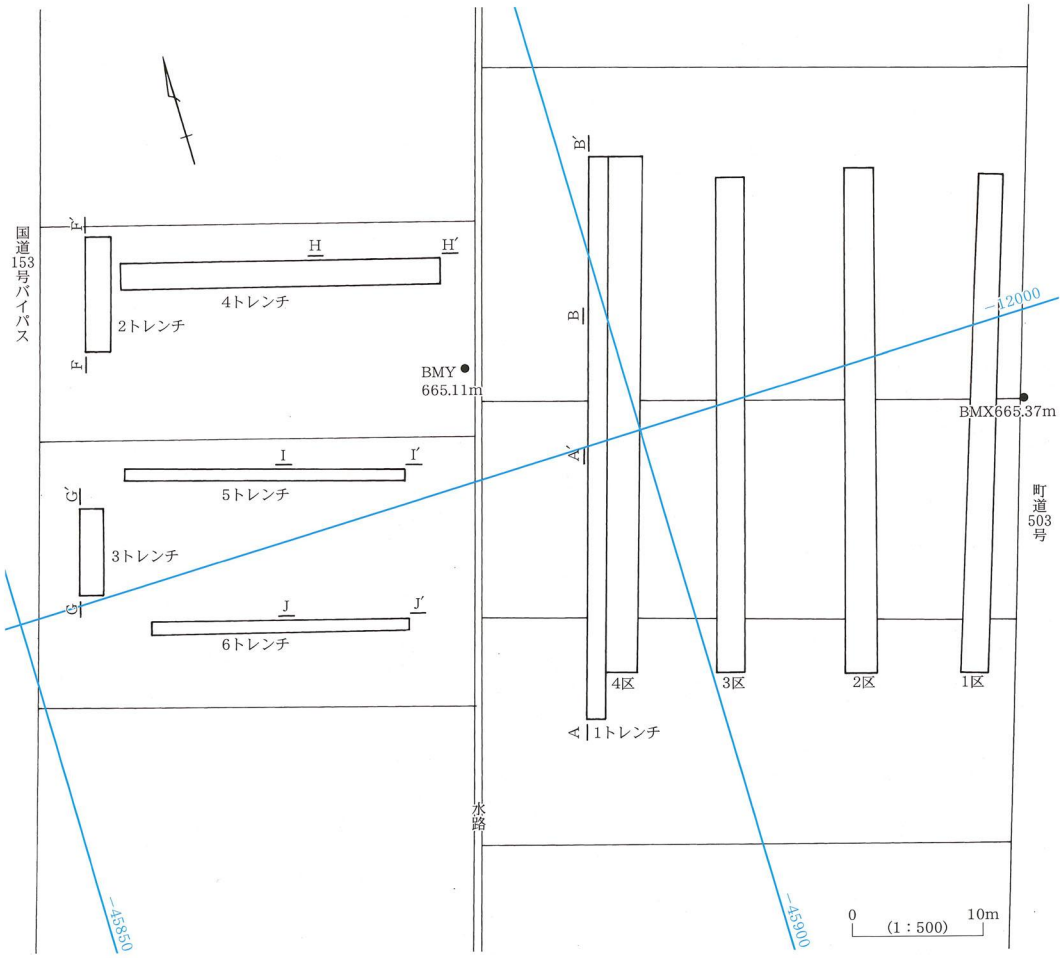
なお、敷地の西方部の駐車場用地については、現況の地盤を変えずに仮舗装を施すため、記録保存の対象から除外したが、部分的な雨水廃水枡や看板設置個所を中心に、４本のトレンチ設定による遺構内容確認調査を実施している。

調査の結果、今回検出された遺構は以下のとおりである。

・耕作関連遺構－各区１面(近世～近代)

・溝状遺構－４区１面(近世～近代)

・水田址及び水路状遺構、竪穴状遺構－２面(中世末～近世初頭)




第４図　調査区・トレンチ設定図

## 第２節　土層堆積状況

ここでは昭和29年に調整された事業以前の地形を手がかりにしながら、町教育委員会が過去に実施してきた調査結果を踏まえ、特に隣接地に当る第14・15次調査と、㈶長野県埋蔵文化財センターが実施し

た国道153号線伊那バイパス関連調査の結果を参考に、本調査地の堆積土層の観察とその把握を行った。

調査地はそれまで水田耕作が成されていた地域である。先ず１トレンチを掘削して、土層堆積状況を観察し、１～４区までの掘り下げの目安とした。

**第Ⅰ**層：現水田の耕土であり暗褐色を呈し、12から20㎝の堆積状況が調査区全域で確認された。

**第Ⅱ**層：Ⅲ層を溝状に削り取り、径0.1～1.0㎝の砂礫を埋め土している耕地整理時の整地土の可能性が高い、人為的堆積土層である。Ⅱ層は調査区北の水田域のみの確認で、南の水田域は高まり地形であり、現水田耕作土直下は僅かにⅣ層が残るものの砂礫層となる。

**第Ⅲ**層：暗褐色シルト層であり、粘性が強く木片が含まれていた。遺構確認層１面に当る。

**第Ⅳ**層：Ⅲ層と同じ黒褐色シルト層であり、粘性が強く砂を10％、木片を多く含む。Ⅲ層とⅣ層は堆積状況には大きな変化はないがⅣ層は水路状遺構の検出面である。またⅣ層は、４区から１区で出土している水路状遺構に向かって傾斜しており、４区では15㎝前後の堆積と厚く、１区では８㎝前後で２号水路状遺構に削られて消滅しているところもある。

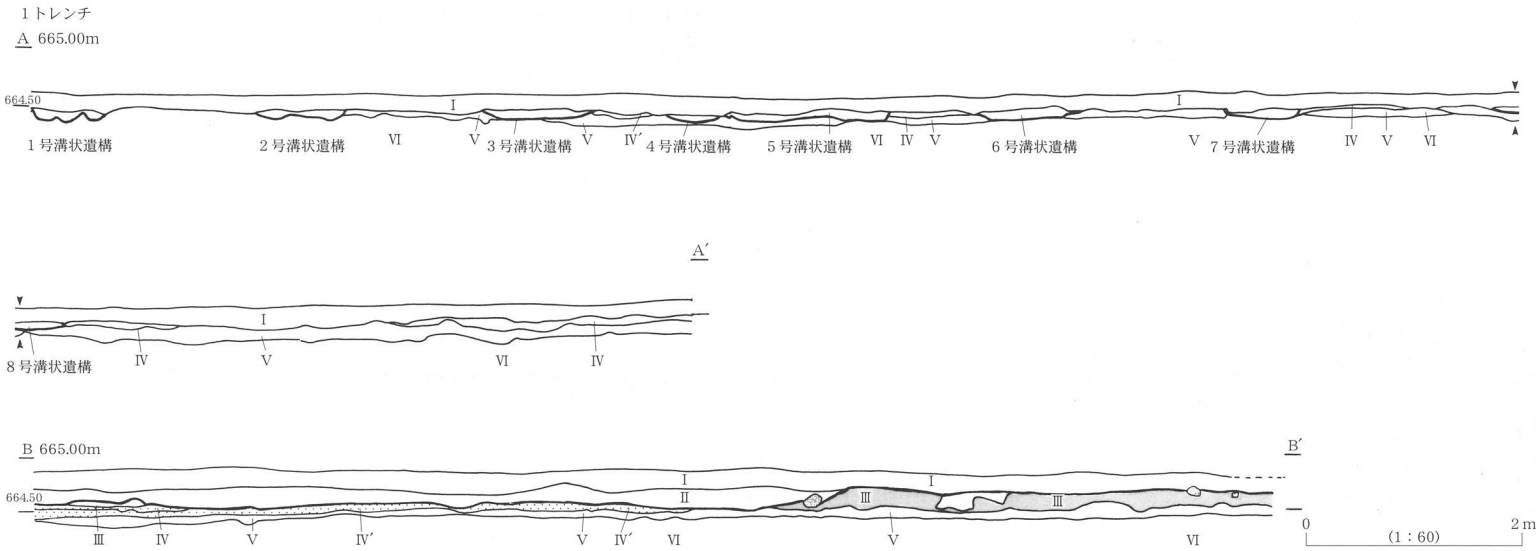
遺構確認層２面に当る。

**第Ⅴ**層：灰黄褐色粘土層で、砂を20％含む。

**第Ⅵ**層：褐灰色で砂礫層である。

試掘調査地の２～６トレンチは６層に分層した。１層は暗褐色を呈する畑の耕作土である。２・３層は黒褐色で粘りのあるシルト層であり、礫を含まない２層と礫を10％含む３層に分層したが、何れも耕地整理以前の水田層と捉えた。４層は灰褐色シルト層で、粗砂を10％、酸化鉄をまばらに含み、やはり耕地整理以前の水田層である。５層は砂質シルト層、６層は礫層で基盤層と捉えた。

１トレンチ土層堆積状況




第5図　1トレンチ土層断面図

| | | | 締り | 粘性 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ層 | 10YR3/4（暗褐色） | 現水田耕土　砂粒を10％含む | 中 | 弱 |
| Ⅱ層 | | 人為的堆積土<br>径0.1～1.0cmの礫を30％以上含む | | |
| Ⅲ層 | 10YR3/3（暗褐色） | 木片を少量含む　シルト層 | 強 | 中 |
| Ⅳ層 | 10YR2/2（黒褐色） | 砂を５％、木片が多く含まれる　シルト層 | 強 | 強 |
| Ⅳ′層 | 10YR4/1（褐灰色） | 砂を10％、灰色粘土をブロック状に含む<br>シルト層 | 強 | 中 |
| Ⅴ層 | 10YR5/2（灰黄褐色） | 砂を20％含む　粘土質シルト層 | 強 | 中 |
| Ⅵ層 | 10YR5/1（褐灰色） | 砂礫層　砂を50％以上含む　砂礫層 | 強 | 弱 |

| 1号溝状遺構 | | 締り | 粘性 |
|---|---|---|---|
| 1層 10YR2/2（黒褐色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 2号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR2/2（黒褐色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 3号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR4/1（褐灰色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 4号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR4/1（褐灰色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 5号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR4/1（褐灰色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 6号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR4/1（褐灰色） | Ⅰ層と類似する | 強 | 中 |
| 7号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR5/3（鈍い黄褐色） | Ⅰ層と類似する | 弱 | 弱 |
| 8号溝状遺構 | | | |
| 1層10YR5/3（鈍い黄褐色） | Ⅰ層と類似する | 弱 | 弱 |

# 第Ⅳ章　遺構と遺物

## 第１節　検出遺構

今回検出した遺構は、すべて水田遺構に関わるもので、各区第Ⅲ層と第Ⅳ層にそれを確認した。また、第Ⅴ層については、水田耕土層としての疑いの下、部分的に遺構検出に努めたが、明確なものは４区北部に検出した竪穴状遺構のみで、他の状況は不明であった。

１　１面の遺構（第６・７図）

①耕作関連遺構（第７図）

**位置**：１～４区の北部に検出する。南部は、当初より存在しなかったものか、または、耕地整理の段階で削平されたかは不明。

**土層**（第５図）：各区第Ⅲ層検出面が本遺構の確認面である。しかし、遺構の構築が３・４区では、第Ⅳ層まで達していた。また３・４区においては、上部を暗褐色ないし黄褐色の、しまりの弱い砂礫層に覆われ、また１・２区では、３層と類似する土質の中に５～10㎝大の礫を主体に、人頭大に及ぶ礫も混入する礫土層に覆われていた。洪水の流入に見られるような、自然堆積による粗砂・細砂はなく、人為的な砂礫の埋め込みと判断した。

**形状・規模・構造**：1.5～1.8m間隔で、Ｎ－65°－Ｅのほぼ一定方向に、断面「かまぼこ」ないし「三角形」の畝が並列する形状を呈し、並列する土手を直行する畝も部分的に確認している。畝は、高いもので10㎝、低いもので微かな高まりらしき変化を観察できるものを記録し、図化した。畝間の底地面は、水田遺構の検出時によく見られる踏込み痕を思わせる凹凸が認められた。凹凸は、砂礫が覆う第３・４区において顕著に見られ、凹部に礫が入り込む個所も多数確認できたことから、耕作痕の可能性は薄いと思われる。なお、同様の特徴を示す遺構としては、長野県埋蔵文化財センターが実施した、国道153号線伊那バイパス建設に先立つ同遺跡の調査において、Ⅰ区ＳＸ102とⅢ区ＳＸ101がそれにあたり、耕地の整地等に関わる痕跡として捉えた。

**遺物**：土師器・須恵器、灰釉陶器の他、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉碗などの土器類や、刀子、桶底と思われる木器（62）などが出土しているが、いずれも被覆する砂礫内の混入物である。

**時期**：本遺構は、近世以降に比定できようが、戦後の耕地区画整理事業における構築遺構である可能性も大いに考えられる。

②溝状遺構（第７図）

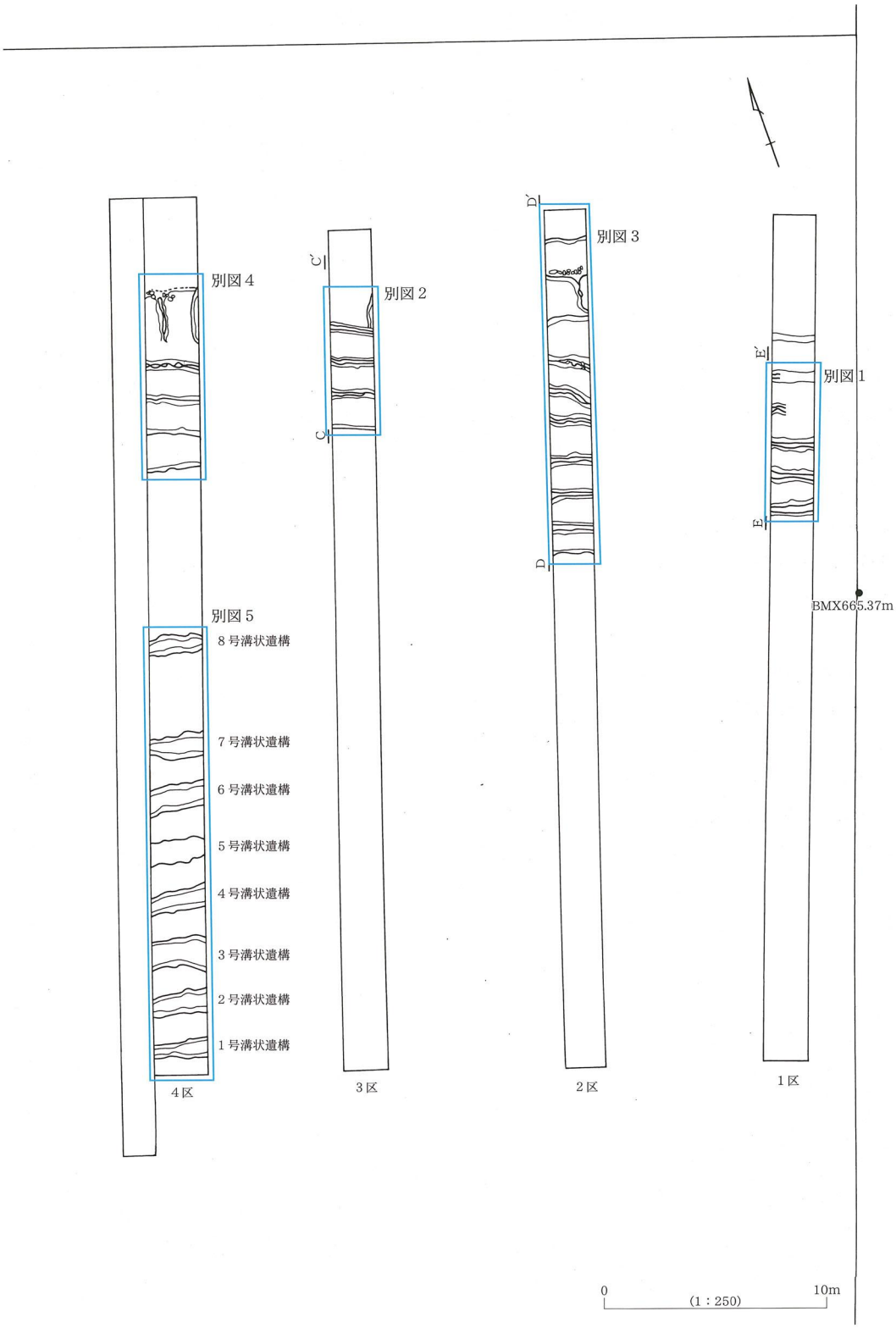
**位置**：４区南部で検出した８条（１～８号）の溝状遺構である。

**土層**：４区南部においては、現水田耕土層（Ⅰ層）直下に第Ⅴ層が堆積し、その上面確認段階で遺構は検出された。覆土は、締りが弱いⅠ層と類似する礫土層であるが、底面部分で粗砂の自然堆積を確認できるものもあった。

**形状・規模・構造**：0.5～1.2m幅で、0.5～0.8m間隔にＮ－70°－Ｅ方向で並列する不整形なものである。20～数㎝の深さと浅く、底面は第Ⅵ層まで達するものもある。耕地区画整理段階で削平されたと判断した。後述する２トレンチ検出の溝状遺構とその特徴が類似するものである。遺構の性格は、水路的な要素は乏しく、耕作痕的なものであろうか。

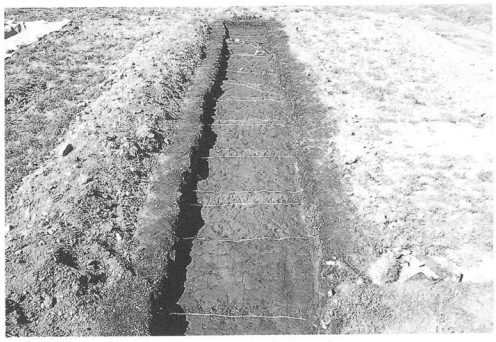
**遺物**：土師器、灰釉陶器、瀬戸美濃系灰釉碗、モモ核等が覆土から僅かに出土している。

**時期**：本遺構は、近世以降で耕地区画整理以前の所産であろう。




第6図　1面遺構検出状況全体図

1区1面全景



2区1面全景

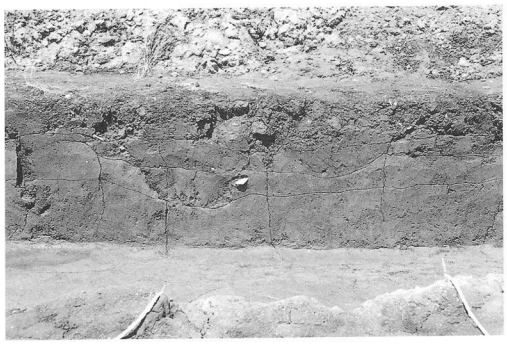
2区1面耕作関連遺構

4区1面耕作関連遺構

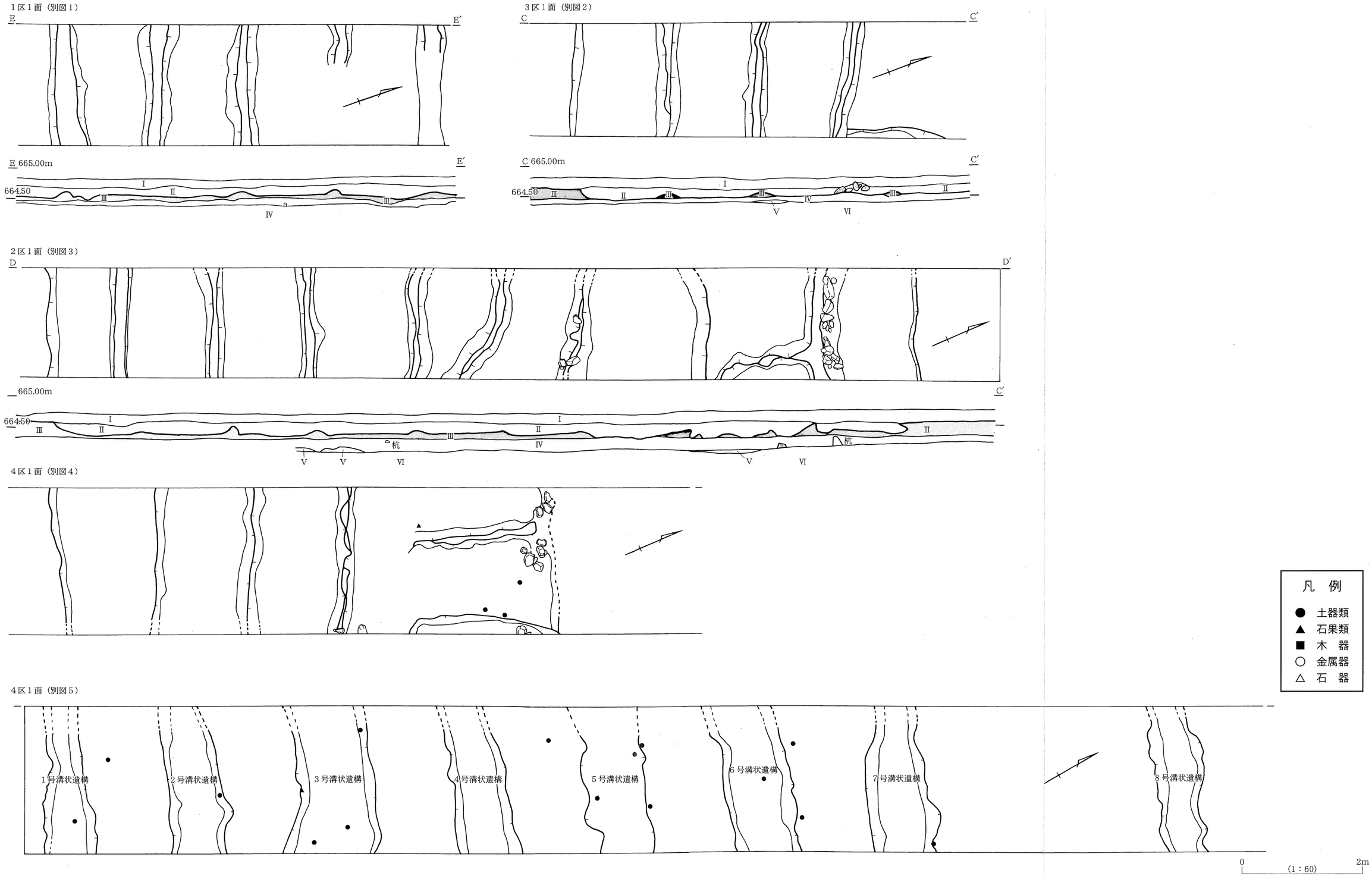
4区耕作関連遺構土層断面

4区溝状遺構全景

4区溝状遺構



4区溝状遺構土層断面




第7図　1面溝状遺構・耕作関連遺構実測図

２　２面の遺構（第８・９図）

①１号水路状遺構（第９図）

**位置**：１区に位置し、調査区を北端部から南方へ縦走する状況で検出する。

**土層**：水田耕作土として捉えた第Ⅳ層に付随する遺構であり、本層検出面が遺構確認面である。遺構は、その上部に重なる２号水路状遺構によって浸食を受け、その堆積層に当る黒褐色の粗砂・小礫層（ａ層）に覆われていたが、部分的に第Ⅲ層にも覆われる。遺構の流路内部には、２号水路底面層に当る黒褐色シルト層（ｂ層）と、暗褐色砂礫層（ｃ層）が堆積する。また、ｃ層及び第Ⅳ層直下には、ｃ層と区分けしにくい灰黄褐色砂礫層（ｄ層）を確認した。これは、第Ⅳ層が堆積する以前の水路、または小河川であると判断した。

**形状・規模・構造**：検出した遺構の全長は、直線距離で21.5mを測る。流路方向は、地形の傾斜状況から、蛇行しながら北方から南方に向かう。蛇行は、調査区の北端部からＮ－176°－Ｗ方向におよそ5.0ｍの個所で西方に緩やかにカーブし、曲がり切った出口からＮ－146°－Ｗ方向へおよそ6.0m進み、更に東方へ緩やかにカーブしながらＮ－175°－Ｅ方向へ5. 5m進んで調査区外に埋没する。遺構は、木杭を多用して密に打設した２条の杭帯を構築し、水路の袖が構成される。その両袖の間が流路部に当る。全体幅は1.1～1.5m、袖幅は40～60㎝を測る。袖の杭は、1.0㎡当り露出したもので150～250本余り、内部に埋没するものを含めるとおよそ400本前後になるであろう。杭は、サワラの割り材が用いられ、僅かであるが表面を炭化させたものや、枝材も見られる。その形状と寸法、先端の加工方法の特徴は一定の共通性を持つ。サワラの割り材を多用した遺構の構成は、過去に実施した発掘調査で最も多く確認した事例と共通している。杭の打ち込みの特徴としては、袖の外側はほぼ垂直に打ち込み、流路面に接する内側では内から外に斜方向に角度を付けて打ち込んでいる。その断面からは「ハ」の字状を呈していることが観察された。露出する杭の基部は、磨耗し丸みを帯びたものがほとんどで、流水の作用とそれによって運搬された土砂との接触で侵食を受けたものと考えられる。その状況は、各袖の内側で路面に接するものほど顕著に表れていた。杭を多用して水路の袖を構築する目的としては、杭を密集させて打ち込むことで軟弱な地盤の強化を図って、水路幅を保ち、流路を安定させるためであると捉えてきたが、杭の基部が路面に露出していることを考慮すると、密集する露出した杭の集合体（杭帯）が水路の護岸そのものである可能性を示唆したい。

**遺物**：遺構を構成する木杭が主な遺物である。水田耕土からは、土師器、灰釉陶器、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉の碗や皿、鉄釉天目、錆釉擂鉢等、銭貨、煙管等の金属器、モモ核が出土している。また、流路内に堆積するｂ・ｃ層を部分的に掘削して遺物の採取に努めたが、成果は得られなかった。

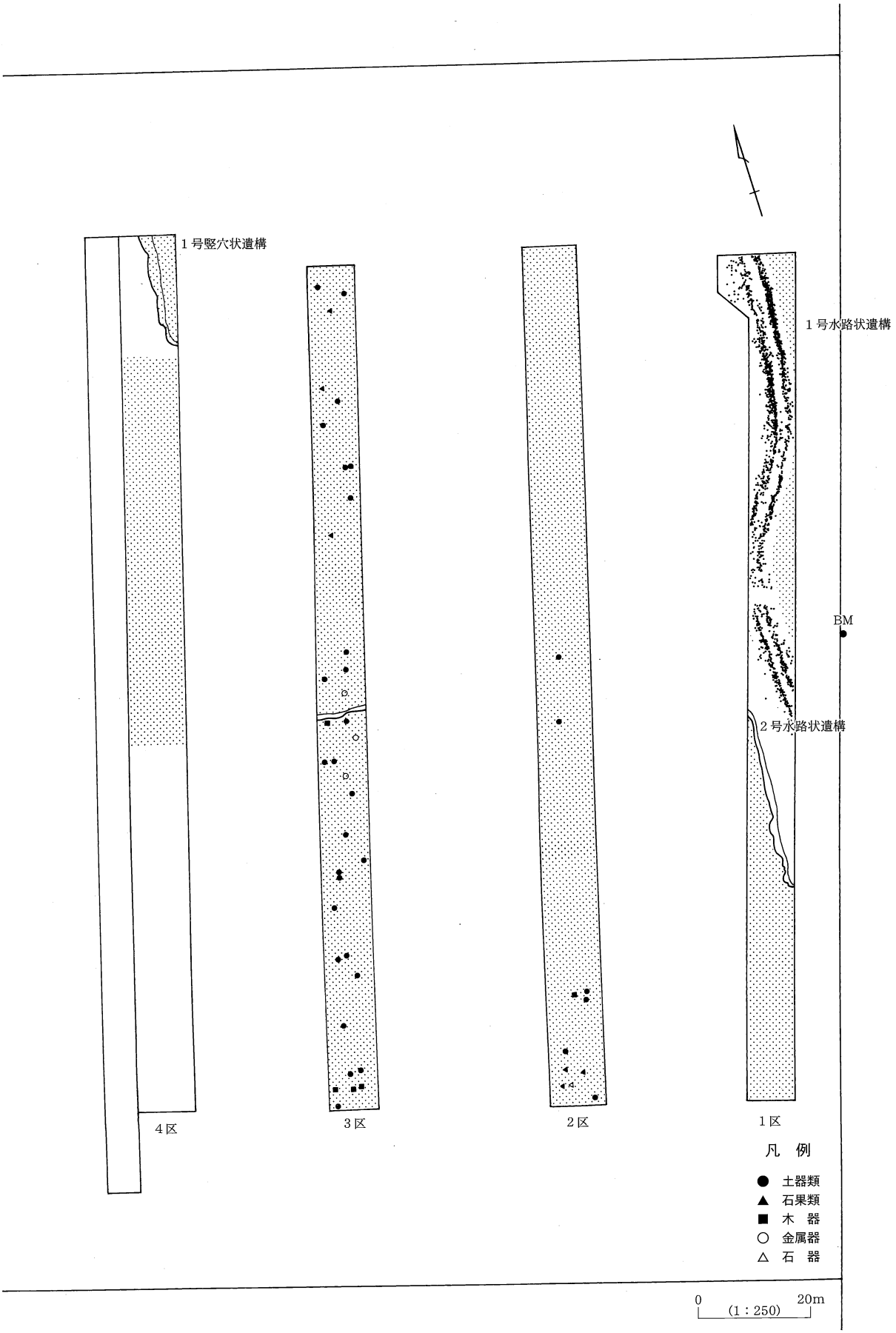
**時期**：本遺構は、中世末から近世初期頃の所産と推察する。

②２号水路状遺構（第９図）

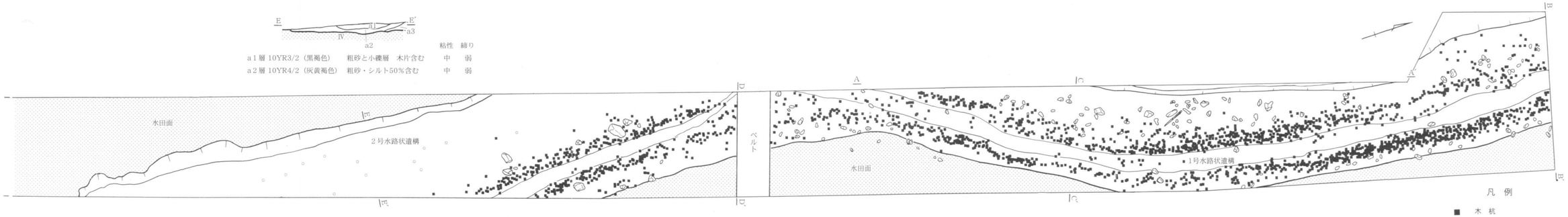
**位置**：１区に位置し、１号水路状遺構を切り、その南部で第Ⅳ層を侵食し検出する。

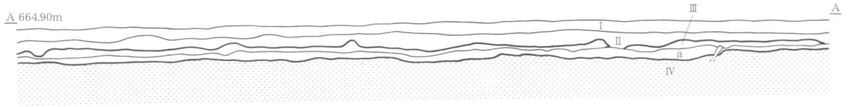
**土層**：第Ⅳ層確認面で検出する。遺構内にはａ層が堆積し、部分的に２層に分層される。

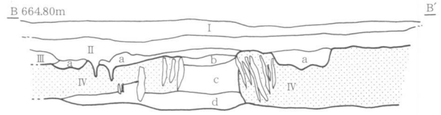
**形状・規模・構造**：検出距離は8.0m余りで、幅は１号水路状遺構と接しているため特定できない。深さは、15㎝前後と浅い。進行方向は１号水路状遺構とほぼ一致し、Ｎ－175°－Ｅを計測する。遺構の西縁は緩やかな段差を有し、底面はほぼ平坦。底面に打設した木杭が朽ちて消滅した小穴痕が列状に確認される。かろうじて消滅しない杭は、第Ⅲ層内で検出し、１号水路状遺構の袖を切るものがそれに相当

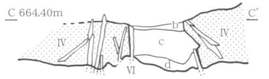


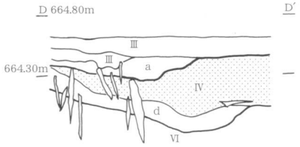

第８図　２面遺構検出状況全体図




0　(1：40)　1m

| | | 粘性 | 締り |
|---|---|---|---|
| b層 10YR3/2（黒褐色） | 砂質シルト層　径1～5cmの礫を10%含む | 弱 | 弱 |
| c層 10YR3/3（暗褐色） | 径1～10cmの砂礫層　シルト・木片を少量含む | 弱 | 弱 |
| d層 10YR4/2（灰黄褐色） | 径1～10cmの砂礫層 | 弱 | 中 |

土層断面（B－B′）

土層断面（C－C′）

土層断面（D－D′）

水路状遺構全景（南方より）

水路状遺構近景（北方より）

第9図　水路状遺構平面図、土層断面図

するものと確認した。杭は、クリやマツの他、樹種を特定できない広葉樹の枝材などで、ほぼ垂直に間隔を置いた列を意識して打設される。

**遺物**：モモ核が数点出土したが、その他は特に出土していない。

**時期**：本遺構は、近世以降の所産と推察するが、時期の特定はできない。

③１号竪穴状遺構（第10図）

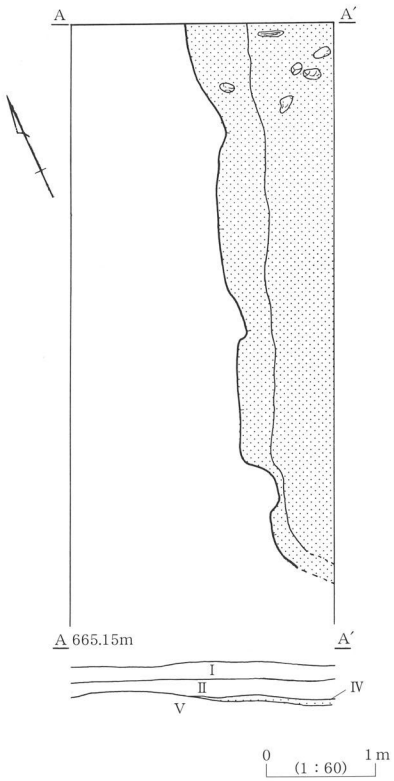
**位置**：４区北部に位置する。

**土層**：第Ⅳ層を削平し、第Ⅴ層確認面で本層の段部を確認し、遺構として捉えた。

**形状・規模・構造**：東西1.9m、南北8.0mの範囲で確認し、西方から東方へ10㎝弱の比高を示す緩やかな段部が形成される。段部の側縁は不整形ながらもＮ－170°－Ｗ方向を示す。水田の区画に関わる段であるか、また別の性格をもつ遺構であるか不明である。

**遺物**：遺物は出土していない。

**時期**：中世末から近世初期頃以前の所産であろうが、時期の特定に至っていない。



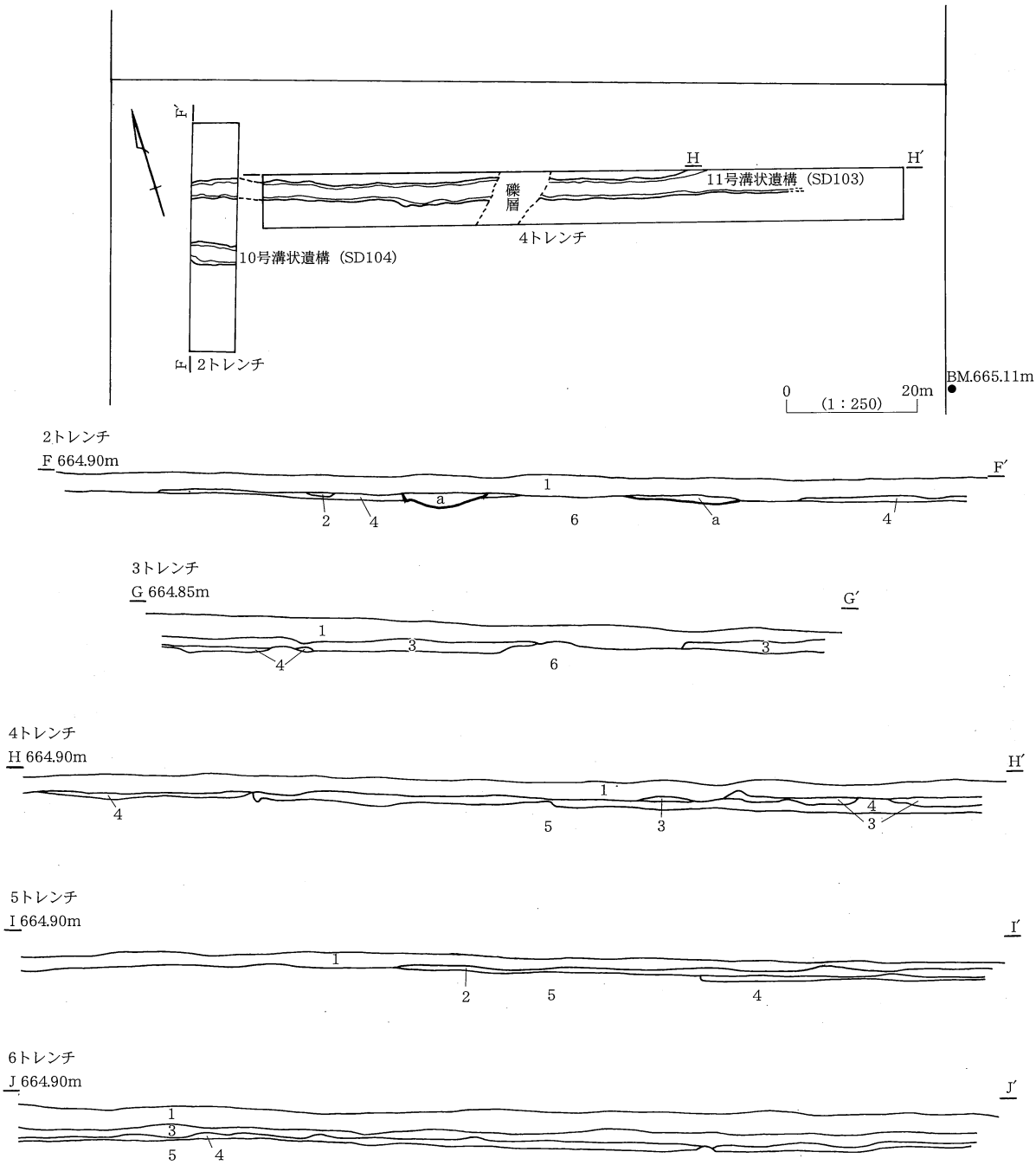

第10図　１号竪穴状遺構平面図、土層断面図

## 第２節　試掘調査結果（第４、11図）

調査地を南北に連なる現用水路の西側駐車場用地において、構造物予定個所を主に遺構の有無と内容確認のため、５本のトレンチを設定し試掘を行った。

その結果、砂礫層まで30～40㎝の深さで５分層された。２・４トレンチの第５層を基盤とする２条の並列する溝状遺構が検出したが、地表より20㎝と浅く、遺構の上部は削平されている可能性が高いと判断した。遺構は、バイパス関連の発掘調査で検出した住居址（ＳＢ101）を切って構築される、２条の構状遺構（第10、11号）で、耕作痕として捉えたＳＤ103・104の東方に継続するものである。また、この他には遺構は確認されなかった。

遺物としては、遺構が確認された２・４トレンチで、近世以後の陶器・磁器片が数点、５トレンチ東部第４層から、弥生時代後期の土器片数点が出土している。

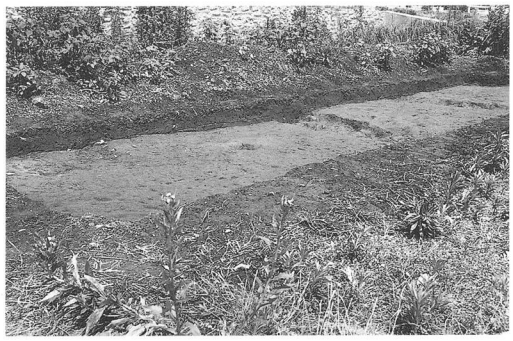



0 (1：60) 1m

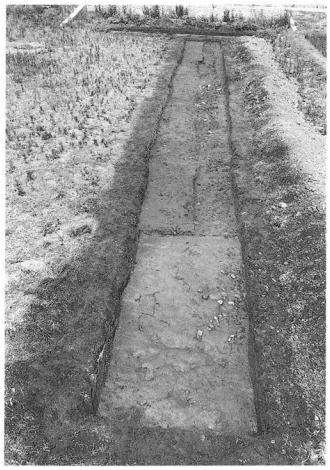
| | | | 締り | 粘性 |
|---|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR3/3（暗褐色） | 畑の耕土 | 弱 | 弱 |
| 2層 | 10YR2/2（黒褐色） | 礫を含まない粘りのあるシルト | 中 | 強 |
| 3層 | 10YR2/3（黒褐色） | 径0.1cmの細かい礫を10％含むシルト | 強 | 中 |
| 4層 | 10YR4/1（褐灰色） | 粗砂を10％、酸化鉄をまばらに含むシルト | 強 | 中 |
| 5層 | 10YR4/1（褐灰色） | 砂質シルト | 強 | 中 |
| 6層 | 10YR3/3（暗褐色） | 礫層 | 中 | 弱 |
| a層 | 10YR2/2（黒褐色） | 10、11号溝状遺構覆土 | 中 | 強 |

第11図　試掘調査遺構平面図、トレンチ土層断面図

2トレンチ

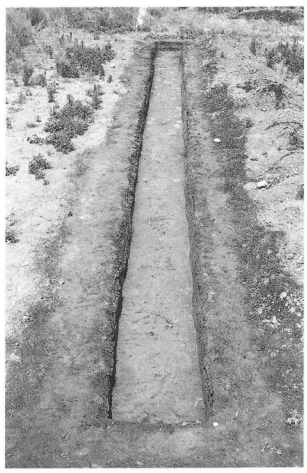


2トレンチ土層堆積状況



4トレンチ

5トレンチ



6トレンチ

3トレンチ

6トレンチ土層堆積状況

## 第3節　遺物

1　土器類（写真図版1、2）

遺物は、遺構確認層1面と2面の検出段階と、2面の削平段階で出土したものを、層位的に記録し取り上げを行ったが、特に土器類に至っては、出土総数190点余りであったが、器種・器形の判別しがたい小破片での遺存状態であるため、図化することができなかった。よって本報告では、主なものについては写真図版による紹介と、記述による概要説明としたい。

**縄文土器**：遺存状態が悪く、文様等で時期を特定できなかったが、胎土・焼成の特徴で3点のみ縄文土器と判別した。

**弥生土器**：明らかに弥生土器と判別できたものは、5トレンチ東部4層内から一括で出土した9点のみで、すべて後期の所産である（1～3）。

**土師器・須恵器・灰釉陶器**：土師器（4～5）は、後述の土師器系土器と異なるもので21点出土したが、古墳時代所産は甕・坏等、平安時代所産は内黒の坏等がある。須恵器（9～12）は11点出土しており、平安時代所産の坏以外は甕等の器種と思われ時期の特定は不明。灰釉陶器（13～19）は、皿、碗、壺で7点のみが出土。量的には少ないが、各層から満遍なく出土しており、特に平安時代所産物に至っては、ほぼ9世紀代にまとまりを見せている。

**土師器系土器・陶器・磁器**：土師器系土器は出土総数34点の内、31点が内耳鍋（20～25）、3点はカワラケ（26・27）であり、主に第Ⅳ層からの出土が多い。陶器は出土総数43点で、器種及び産地が判別しがたい30点余りは第Ⅲ層までに集中して出土しており、近世以降の所産物と判断した。鉄釉天目茶碗・碗（28～30）、瀬戸美濃系の灰釉皿・碗（35～50）は、17世紀代及びその前後所産物で主に第Ⅳ層からの出土が目立つ。18世紀代及びそれ以降では、錆釉擂鉢（31～34）、鉄釉灯明皿・碗等（51～59）、灰釉丸碗等がある。磁器は、3点のみ中国輸入青磁片と、近世以降の染付け等42点が出土しているが、第Ⅲ層までに出土がまとまる。

2　土製品・石器（第12図、写真図版3）

土製品は、土錘1点が2区Ⅳ層内より出土した。仲町遺跡検出の平安時代竪穴住居址より類似品がみられる。石器は、図化した頁岩製の砥石1点のみが2区第Ⅲ層内より確認。他は、黒耀石片が数点各層より確認した。

3　金属器（第12図、写真図版3）

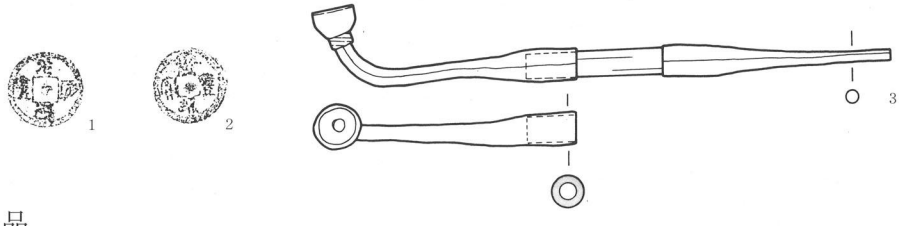
銭貨が2点（1・2）、煙管は、竹製ラウが残る、脂返しが湾曲する雁首と肩付吸口をもつもの（3）、肩付吸口のみ2点（4・5）が、第、層中より出土。第Ⅳ層中より刀子1点（6）が出土している。煙管は、17世紀代の所産と考える。

4　石果類（第12図、写真図版3）

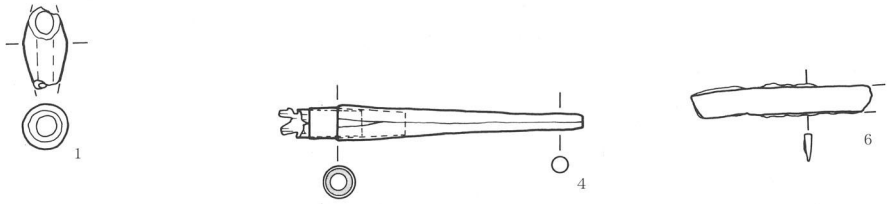
第Ⅲ・Ⅳ層中より、食生活や祭司に関わる植物遺体として、モモ核50点余り（1～19）、オニグルミ核1点（20）が出土している。

煙管出土状況

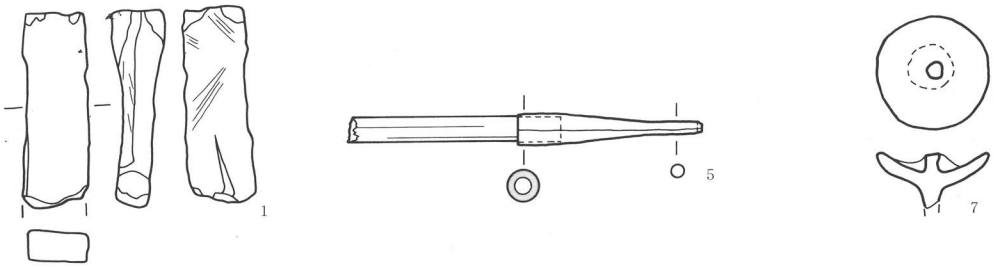
金属器



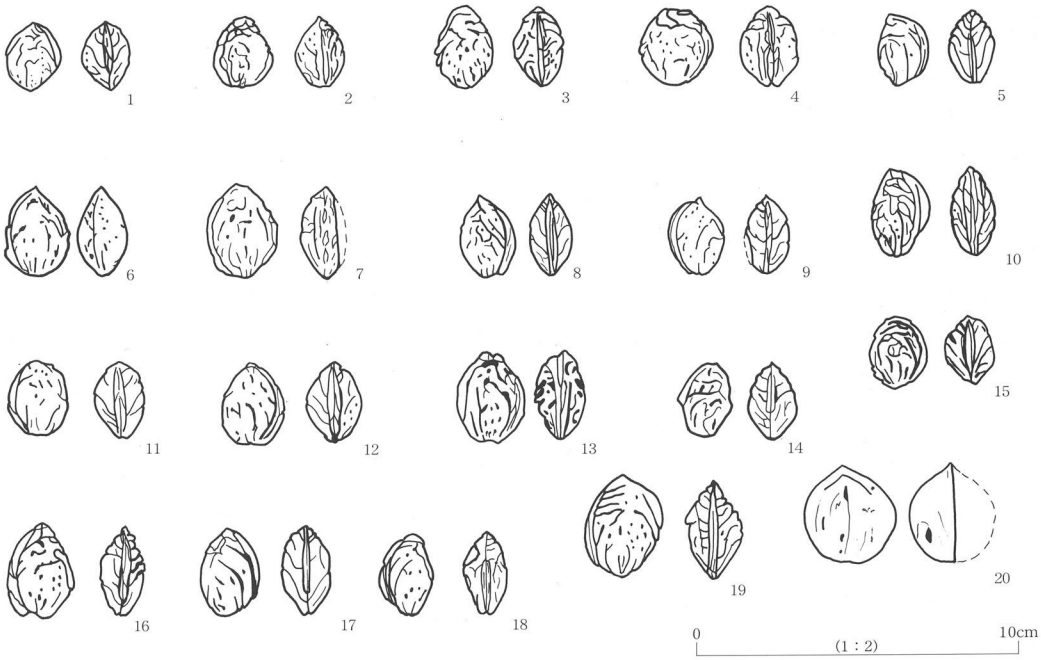

土製品




石　器




石果類




第12図　出土金属器、土製品、石器、石果類実測図

第２表　出土金属器観察表

（法量cm・g）

| 番 号 | 出土地点 | 器種 | 材 質 | 長 さ | 直 径 | 重 さ | 遺存状態 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | １区 | 銭貨 | 銅 | 厚さ0.1 | 2.4 | 2.0 | 完形 | 元豊通宝　北宋銭 |
| 2 | ３区 | 銭貨 | 銅 | 厚さ0.1 | 2.3 | 1.7 | 完形 | 元豊通宝　北宋銭 |
| 3 | ３区 | 煙管 | 雁首・吸口－銅<br>ラウー竹 | 18.2 | 1.0 | 雁首―7.5<br>吸口―3.7 | 完形 | 雁首一油返しが大きく湾曲する河骨形<br>銅板材を曲げて細い筒状とする。 |
| 4 | ２区 | 煙管 | 雁首・吸口－銅<br>ラウー竹 | (8.7) | 1.15 | 吸口―7.0 | 雁首なし | 銅板材を細い筒状に丸める。<br>内部に竹残存 |
| 5 | ３区 | 煙管 | 雁首・吸口－銅<br>ラウー竹 | (5.8) | 0.95 | 吸口―4.3 | 雁首なし | 銅板材を細い筒状に丸める。<br>内部に竹残存 |
| 6 | １区 | 刀子 | 鉄 | 11.4 | 厚さ2.1<br>幅 0.7 | 23.0 | 一部欠損 | |
| 7 | ３区 | コマ | 鉄 | 高さ1.6 | 3.4 | 15.4 | ほぼ完形 | |

第３表　出土土製品観察表

（法量cm）

| 番 号 | 出土地点 | 器種 | 長 さ | 幅 | 重 さ | 遺存状態 | 色 調 | 成形・調整 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3区 | 土錘 | (2.4) | 1.4 | 3.6 | 一部欠損 | 10ＹＲ6/4（にぶい黄橙） | ナデ　孔径0.4 | |

第４表　出土石器観察表

（法量cm）

| 番 号 | 出土地点 | 器種 | 長 さ | 幅 | 重 さ | 遺存状態 | 色 調 | 成形・調整 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ２区 | 砥石 | 9.3 | 3.0 | 91.0 | ほぼ完形 | 5ＹＲ6/8（橙） | 頁岩？小型　使用頻度高い | |

第５表　出土石果類観察表

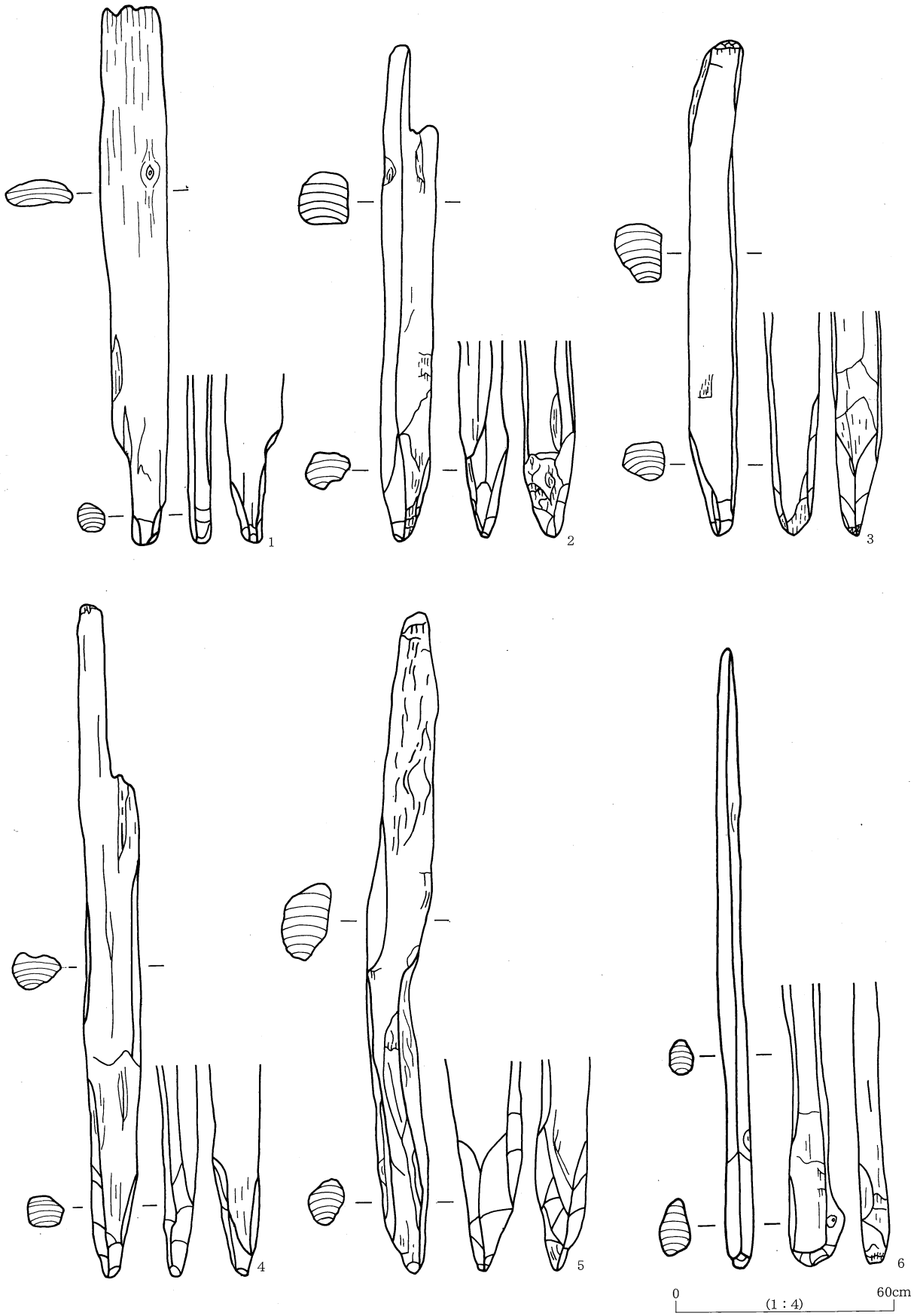
（法量cm・g）

| 番 号 | 出土地点 | 種 類 | 長 さ | 幅 | 厚 さ | 重 量 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | １区 | 植物の核 | 2.2 | 1.7 | 1.4 | 2.0 | モモ核 |
| 2 | １区 | 植物の核 | 2.2 | 1.8 | 1.6 | 2.0 | モモ核 |
| 3 | １区 | 植物の核 | 2.5 | 1.8 | 1.6 | 3.0 | モモ核 |
| 4 | １区 | 植物の核 | 2.4 | 2.3 | 1.8 | 4.0 | モモ核 |
| 5 | １区 | 植物の核 | 2.3 | 1.6 | 1.4 | 2.0 | モモ核 |
| 6 | ２区 | 植物の核 | 2.8 | 2.0 | 1.6 | 3.0 | モモ核 |
| 7 | ２区 | 植物の核 | 3.0 | 2.2 | (1.1) | 3.0 | モモ核　一部欠損 |
| 8 | ２区 | 植物の核 | 2.5 | 1.7 | 1.4 | 2.0 | モモ核 |
| 9 | ２区 | 植物の核 | 2.4 | 1.8 | 1.4 | 2.0 | モモ核 |
| 10 | ２区 | 植物の核 | 2.7 | 1.8 | 1.4 | 3.0 | モモ核 |
| 11 | ２区 | 植物の核 | 2.3 | 1.9 | 1.6 | 3.0 | モモ核 |
| 12 | ２区 | 植物の核 | 2.5 | 2.6 | 1.8 | 3.0 | モモ核 |
| 13 | ３区 | 植物の核 | 2.9 | 2.1 | 1.5 | 4.0 | モモ核 |
| 14 | ３区 | 植物の核 | 2.8 | 1.5 | 1.5 | 3.0 | モモ核 |
| 15 | ３区 | 植物の核 | 2.2 | 1.9 | 1.5 | 3.0 | モモ核 |
| 16 | ３区 | 植物の核 | 3.0 | 2.1 | 1.4 | 3.0 | モモ核 |
| 17 | ４区 | 植物の核 | 2.7 | 1.9 | 1.6 | 2.0 | モモ核 |
| 18 | ４区 | 植物の核 | 2.6 | 1.8 | 1.4 | 2.0 | モモ核 |
| 19 | ４区 | 植物の核 | 3.3 | 2.3 | 2.8 | 5.0 | モモ核 |
| 20 | ４区 | 植物の核 | 3.1 | 2.9 | (1.4) | 2.0 | オニクルミ核　一部欠損 |

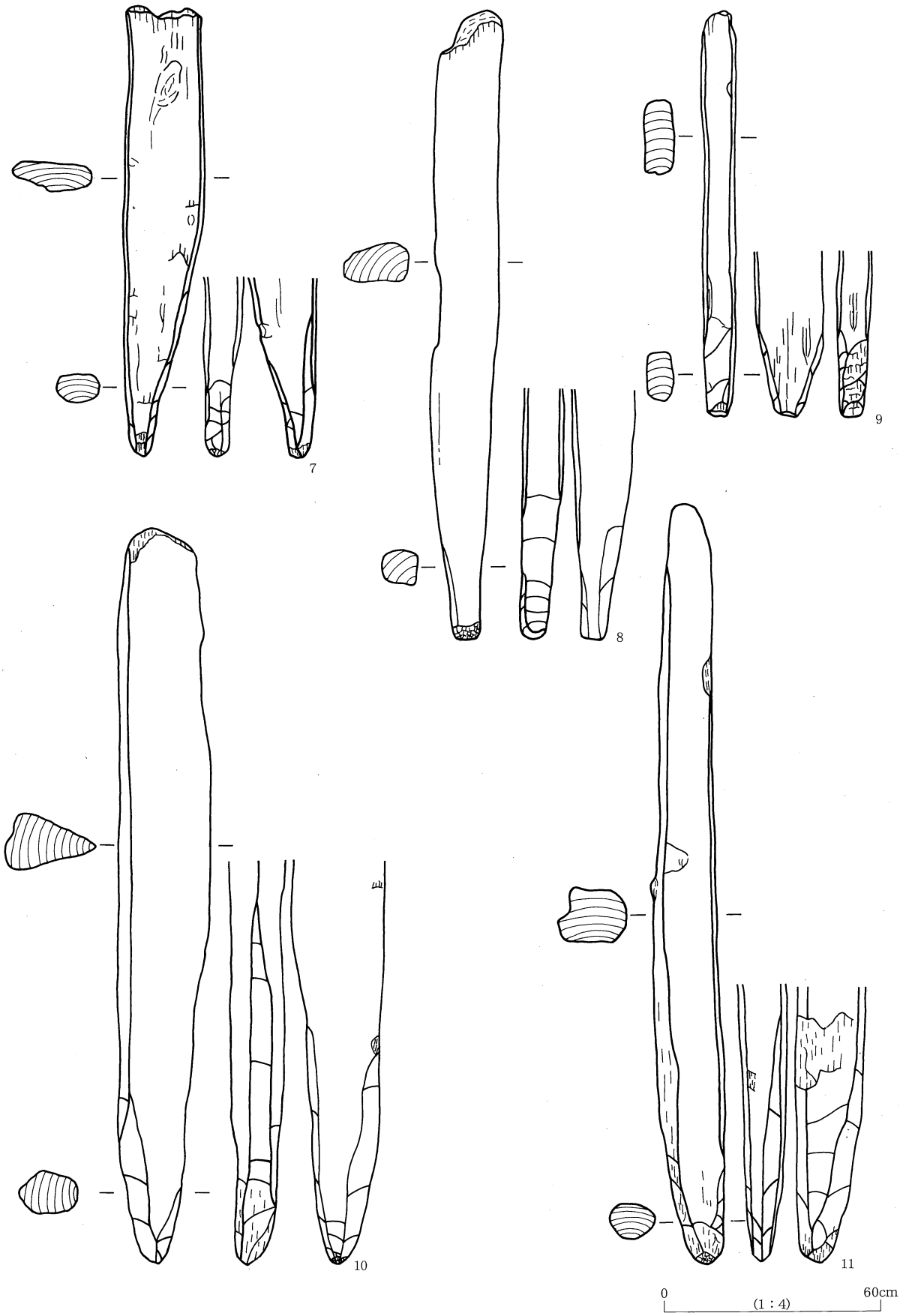
## ５　木器（第13～23図、写真図版４～７）

今回出土したあり木器は、１号水路状遺構を構成する杭（１～57）が主体であり、その他半円形の桶底の一部と思われるもの（58）、用途不明な薄く加工が施された斎串？（59）、縁を弧状に加工を施した用途不明な板状木器（60・61）、樽栓（62）等がみられた。

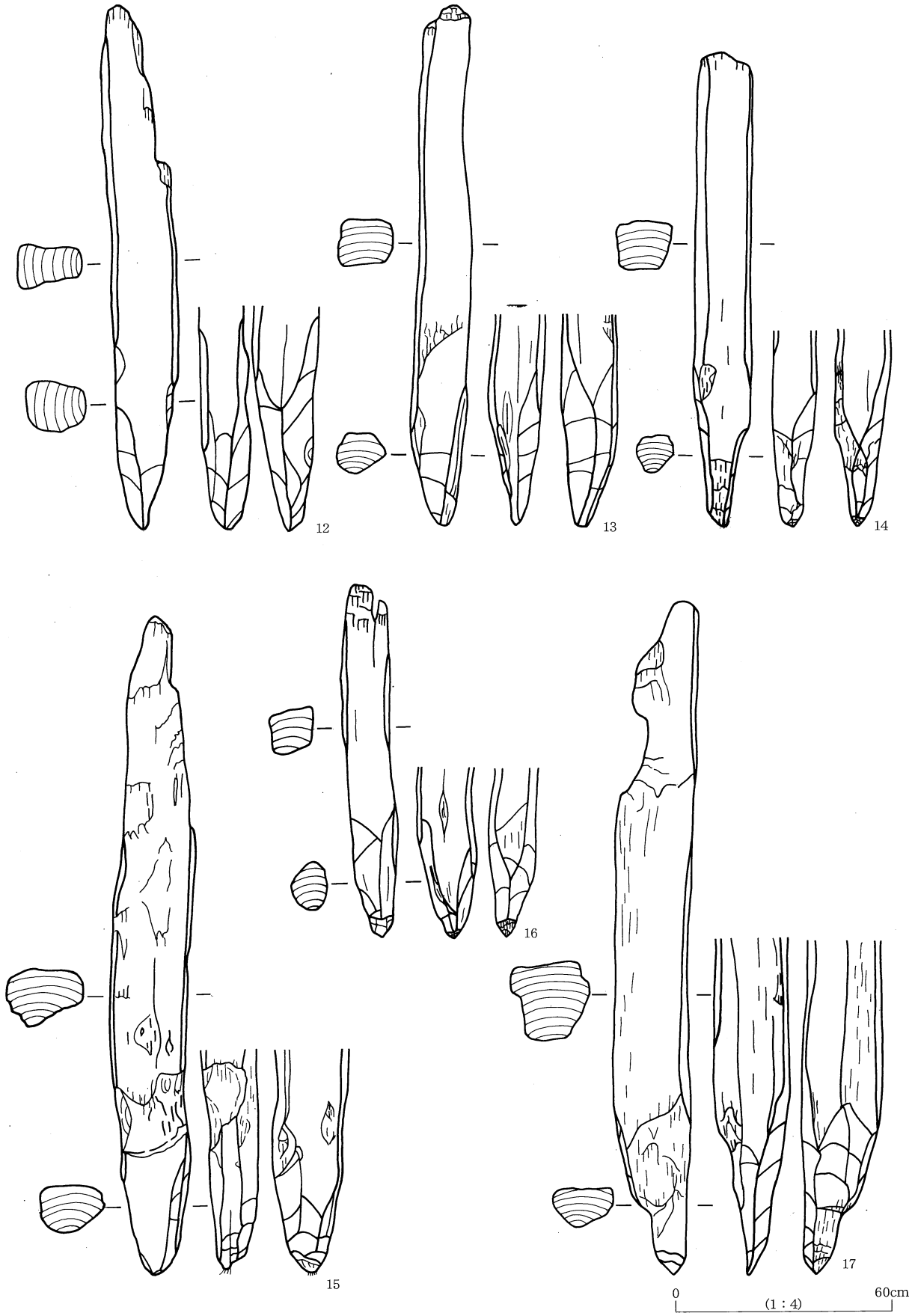
１号水路状遺構に用いられた杭は、過去の調査においても最も数量が多く出土しており、今回のように水路構築材や水田区画に関わる畦畦部・土手部の補強材としての役割を果たしている。特に、中世末～近世初頭期の遺構に多用される杭の樹種は、圧倒的にサワラの割合が高く、今回もその傾向が顕著に表れていた。杭の選定は、柾目の割材による角材と板材が主体を占め、数点のみ枝部を用いた丸木材（42、46）も含まれる。割材は、表皮を除去した丸田材を放射状にみかん割りを行い、小口が三角形を呈する小割された素材を更に木目に沿って薄く割ることで、断面が台形を呈する角材や板材を作出している。先端の加工は、材の側縁を主に鉈か斧のような鉄製の鋭利な刃物を使用して、杭の軸に対して比較的浅い角度から数回の打撃を加えて削り、鋭角さを作出している。また、２号水路状遺構においては、杭の素材がクリ・マツ等の丸木材へとその主体が変わり、サワラ材はあまり用いられなくなる傾向が伺われる。



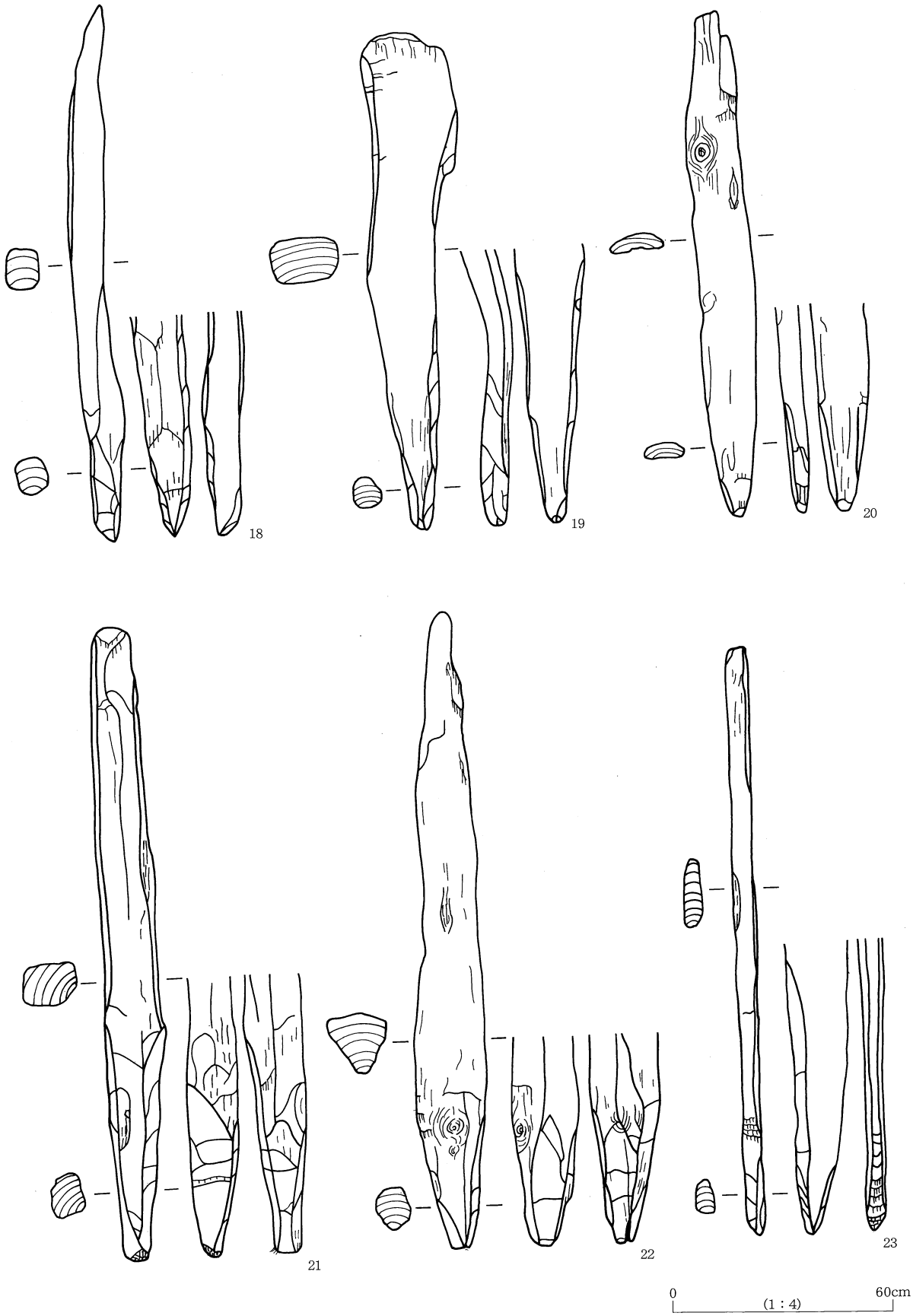

第13図　出土木器実測図１



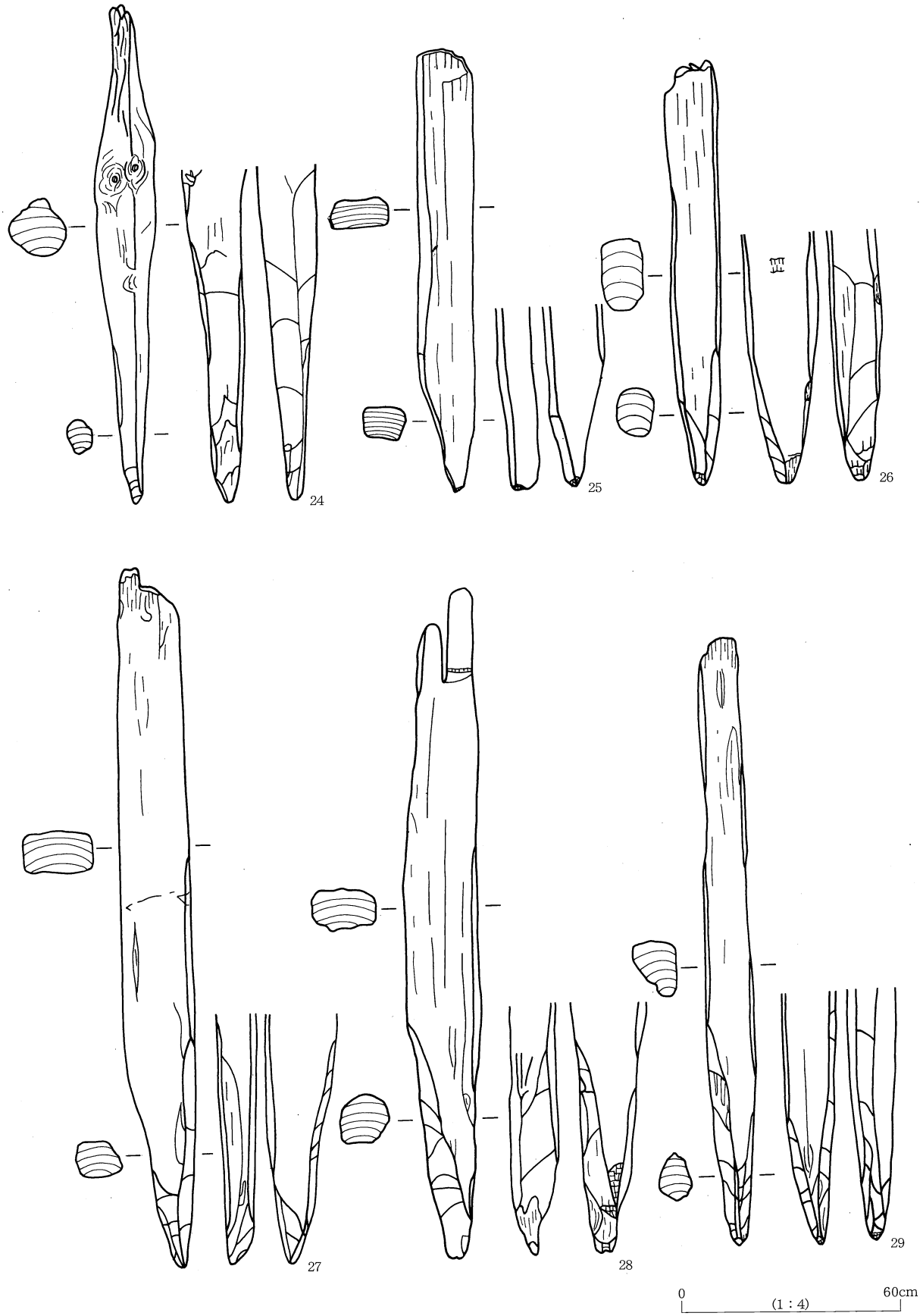

第14図　出土木器実測図２



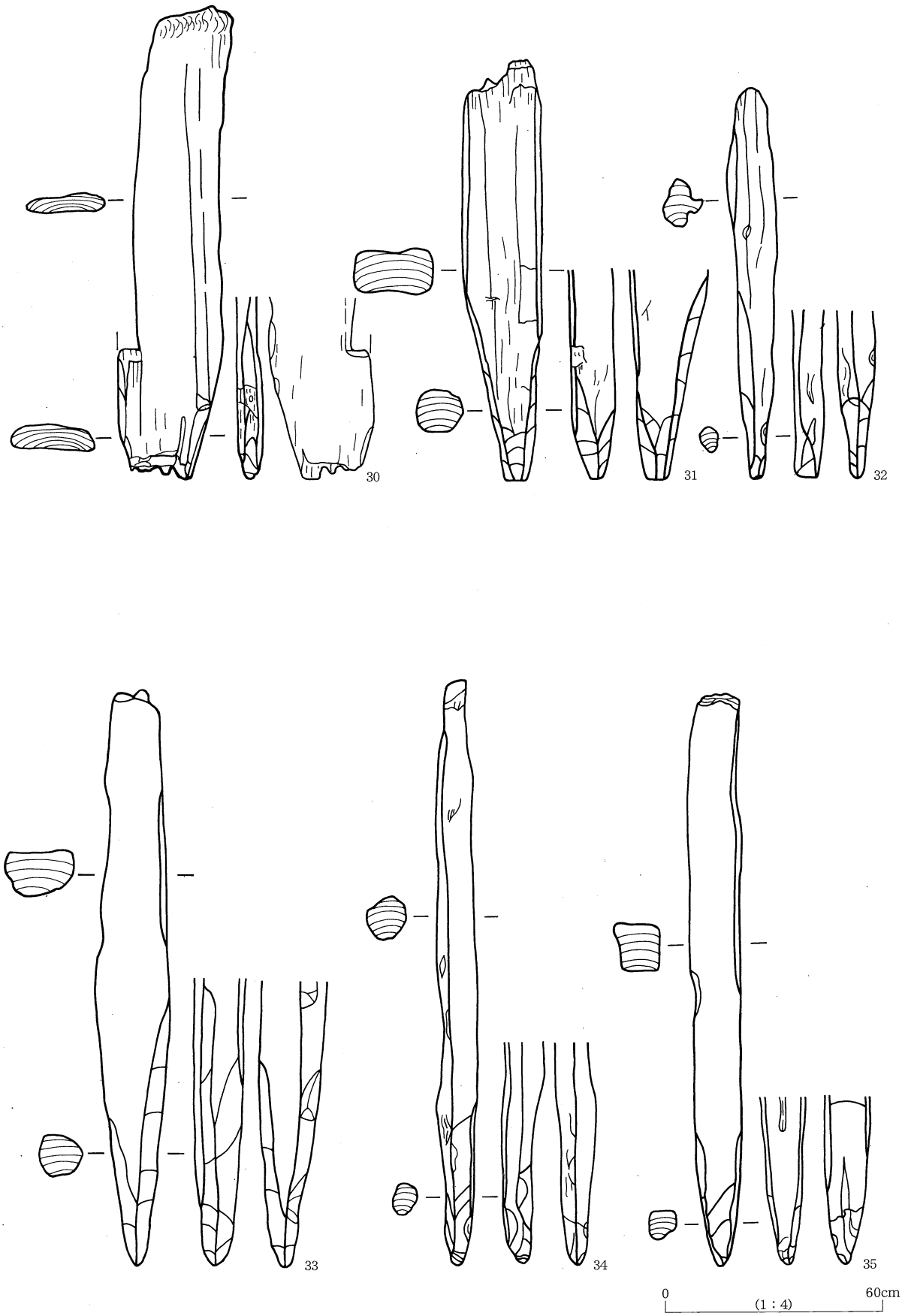

第15図　出土木器実測図３



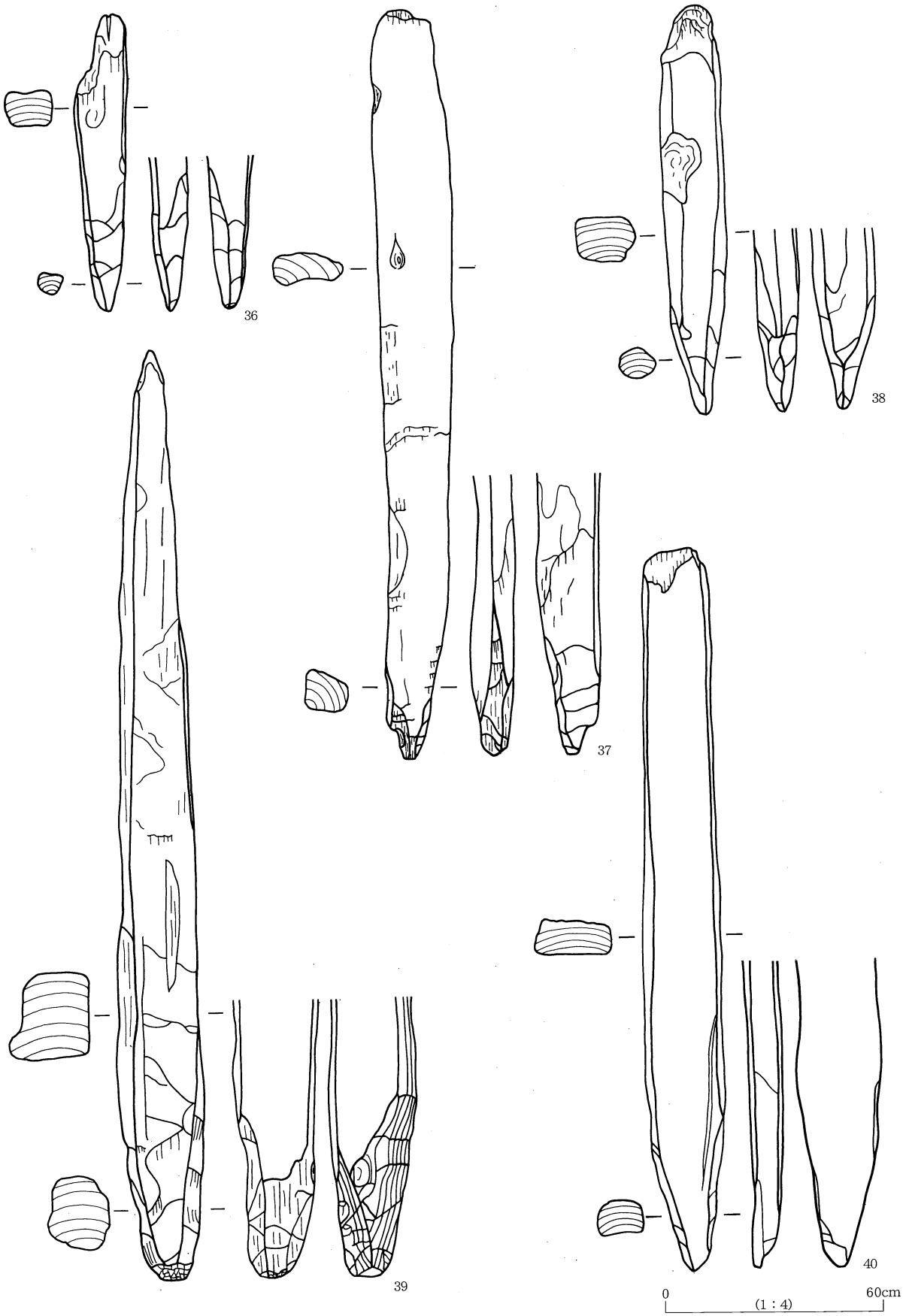

第16図　出土木器実測図４



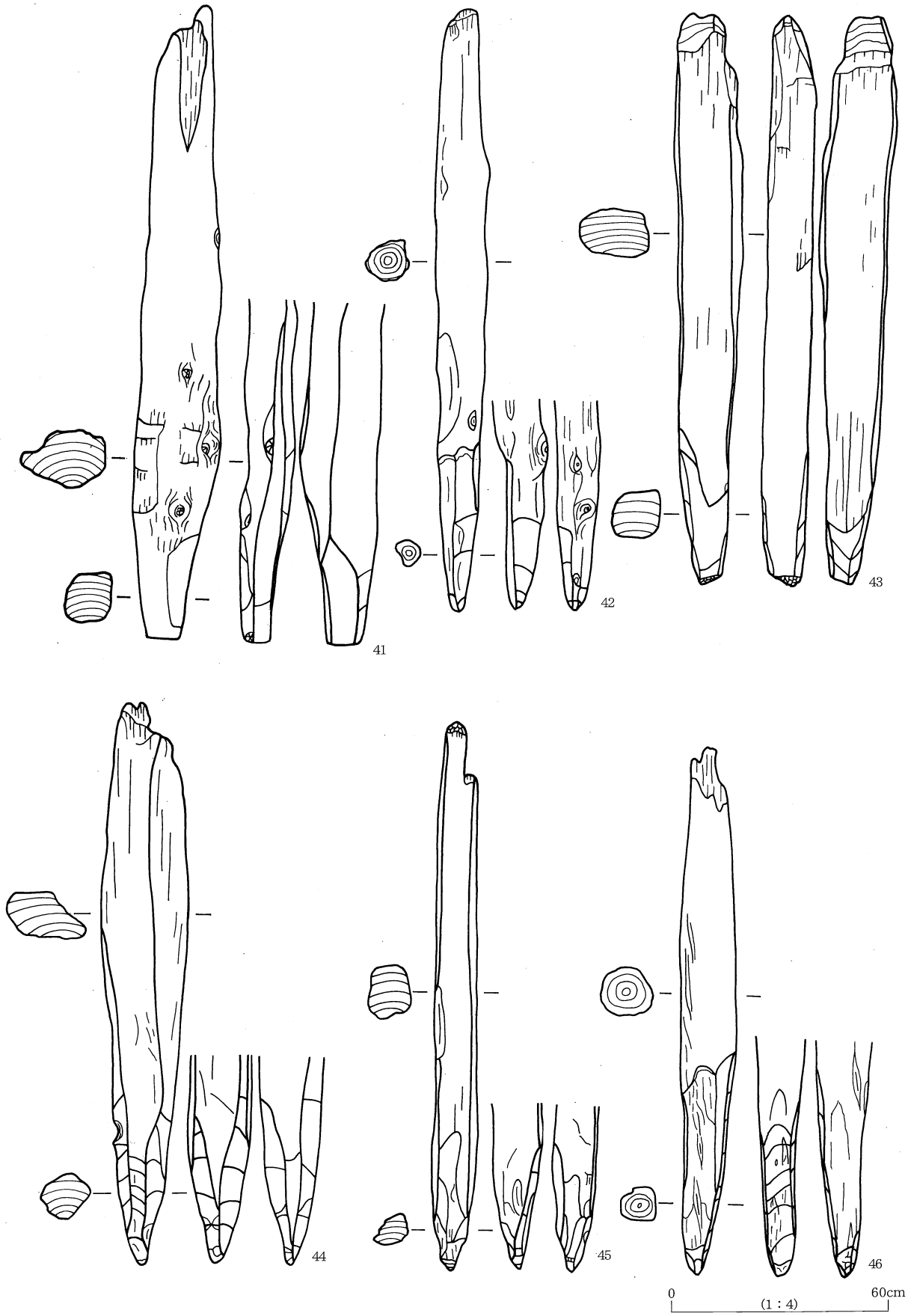

第17図　出土木器実測図５



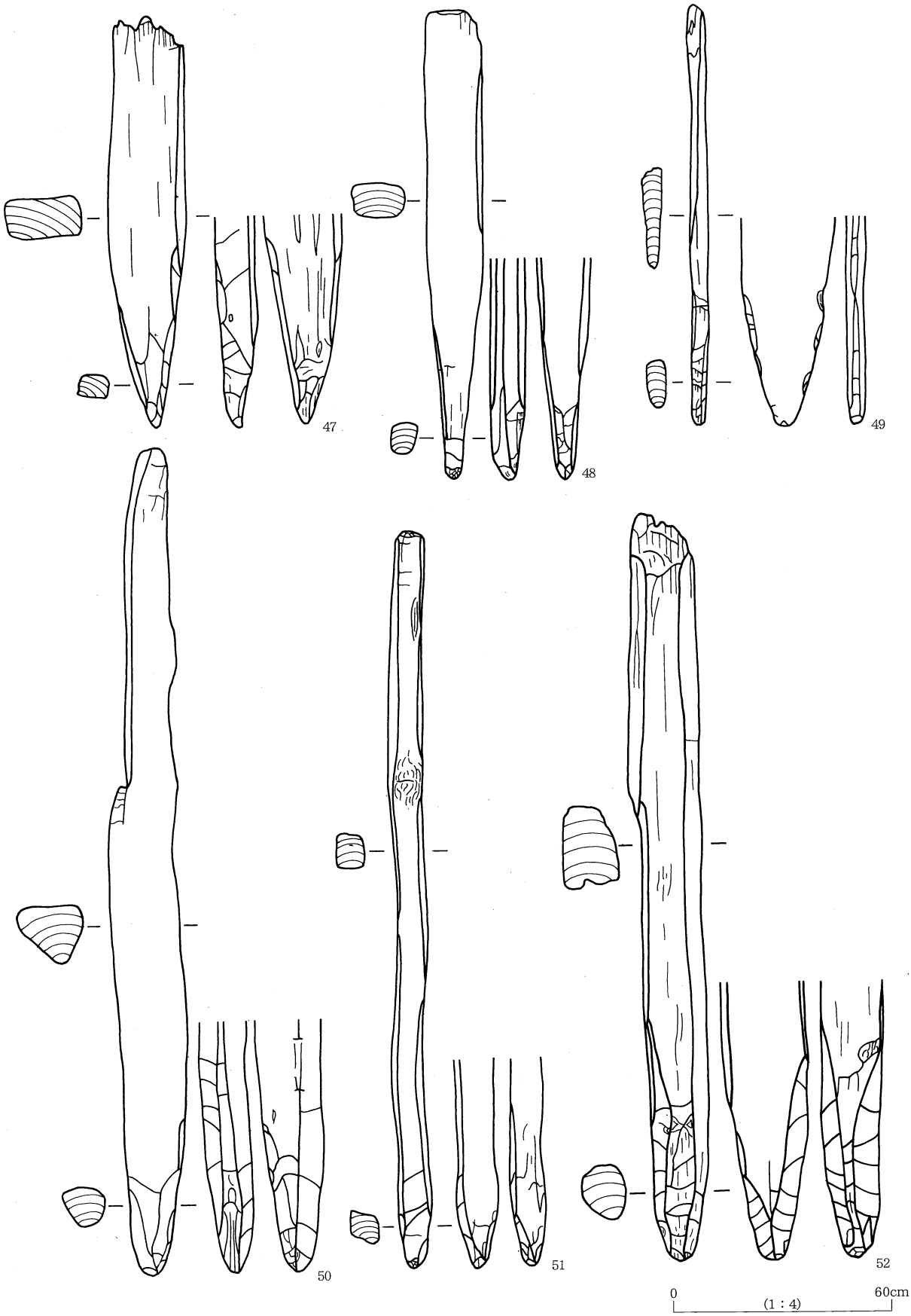

第18図　出土木器実測図６



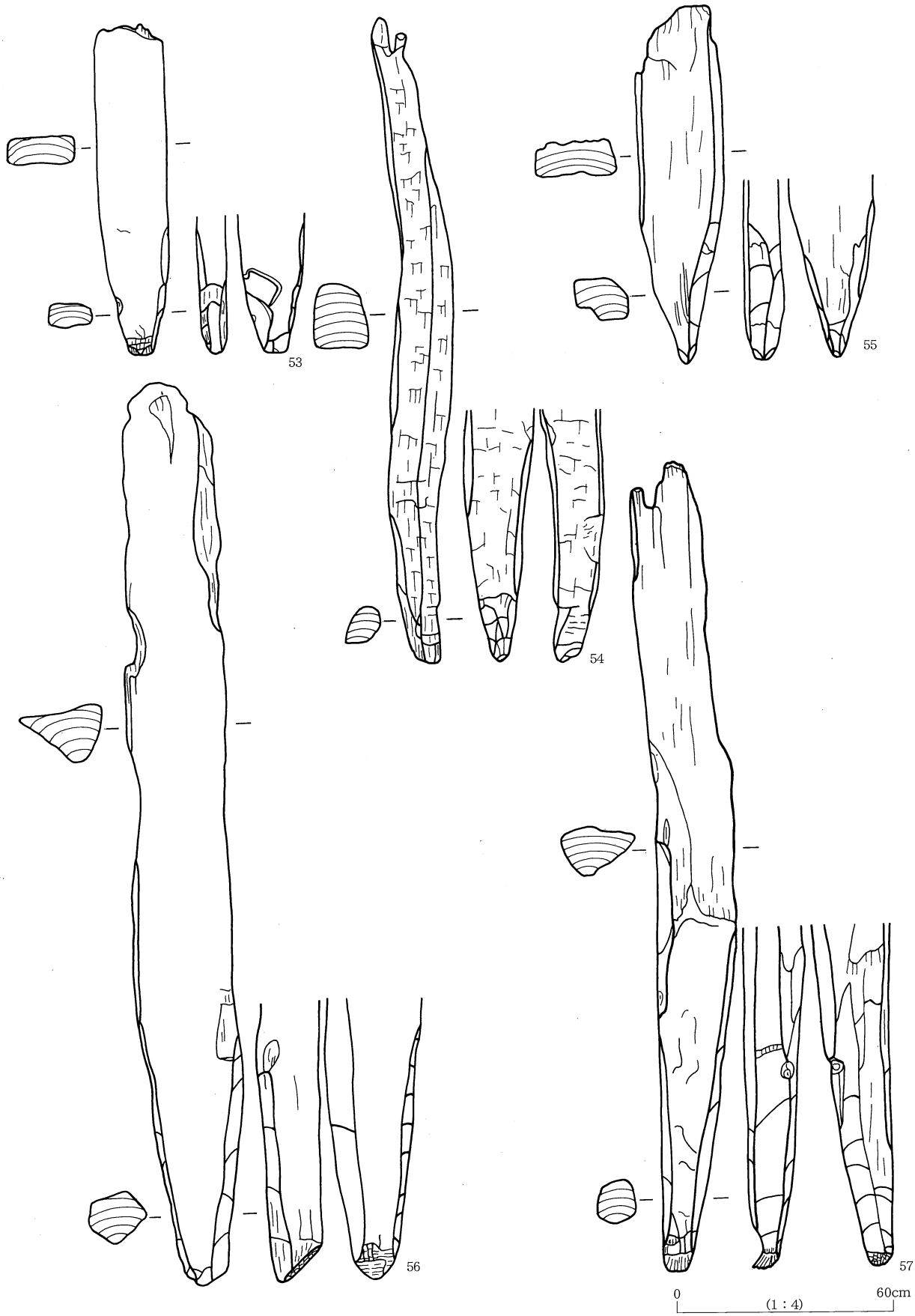

第19図　出土木器実測図７



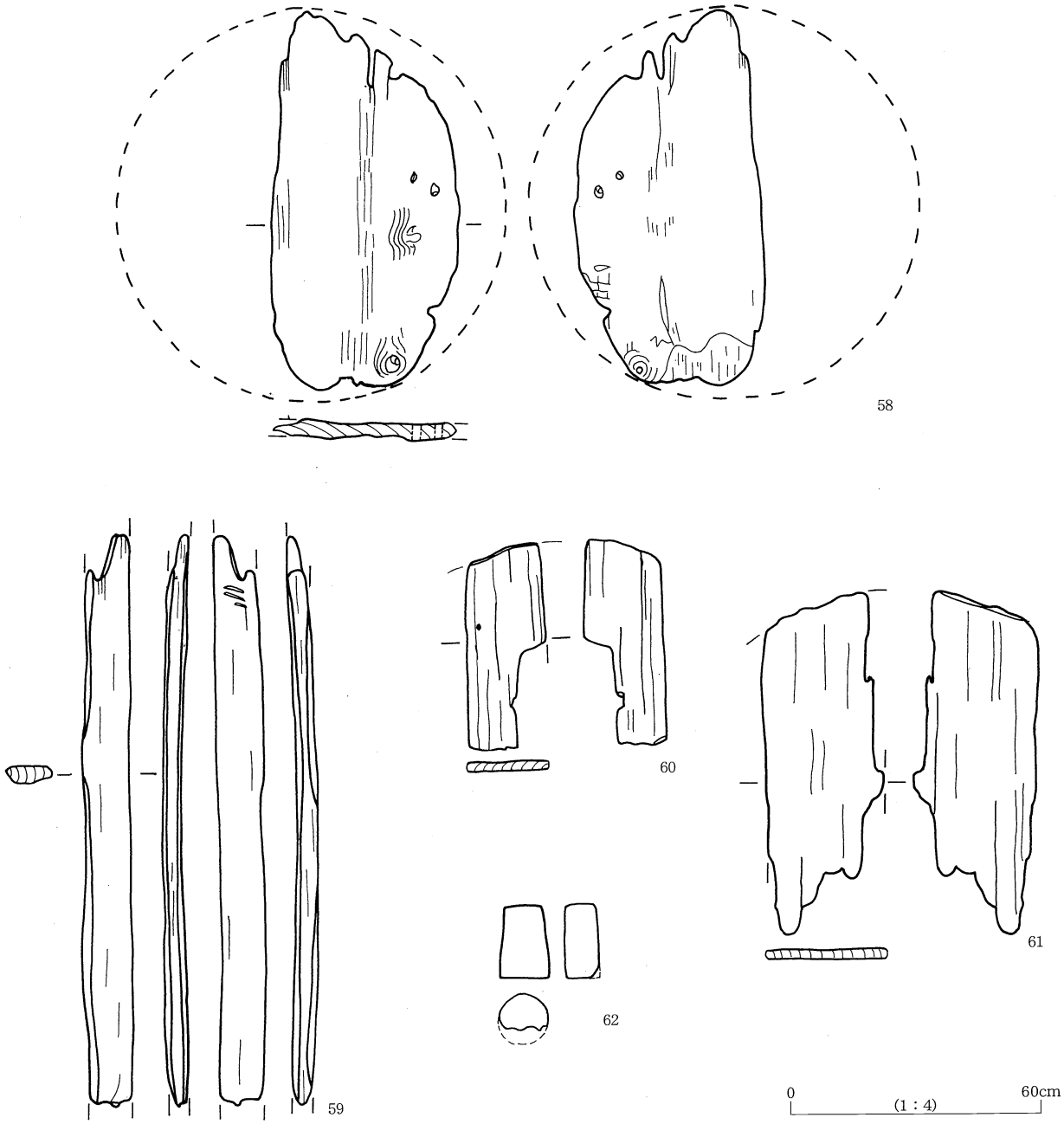

第20図　出土木器実測図８




第21図　出土木器実測図９




第22図　出土木器実測図10




第23図　出土木器実測図11

## 第６表　出土木器観察表

（法量cm・g）

| 番号 | 出土地点 | 器 種 | 長 さ | 幅 | 厚 さ | 重 量 | 小口形状 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1区3トレンチ | 木杭 | (38.2) | (4.5) | (2.0) | (153.0) | かまぼこ | 判割　材質不明 |
| 2 | 1区3トレンチ | 木杭 | (35.0) | (3.6) | (3.8) | (188.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 3 | 1区3トレンチ | 木杭 | (35.1) | (3.0) | (4.1) | (296.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ<br>表皮側に削り痕3ヶ所有り |
| 4 | 1区3トレンチ | 木杭 | (47.7) | (3.7) | (2.4) | (161.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 5 | 1区3トレンチ | 木杭 | (46.9) | (4.1) | (5.4) | (401.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 6 | 1区3トレンチ | 木杭 | (44.0) | (1.8) | (3.5) | (60.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　材質不明 |
| 7 | 1区3トレンチ | 木杭 | (32.3) | (5.4) | (2.0) | (254.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 8 | 1区3トレンチ | 木杭 | (45.2) | (4.4) | (2.6) | (149.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 9 | 1区3トレンチ | 木杭 | (28.1) | (2.2) | (5.0) | (205.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 10 | 1区3トレンチ | 木杭 | (53.8) | (6.3) | (4.0) | (754.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 11 | 1区3トレンチ | 木杭 | (54.4) | (4.5) | (3.7) | (510.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ<br>頭部欠損　板目 |
| 12 | 1区3トレンチ | 木杭 | (32.5) | (4.4) | (3.5) | (294.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 13 | 1区3トレンチ | 木杭 | (36.7) | (3.7) | (3.9) | (317.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 14 | 1区3トレンチ | 木杭 | (33.5) | (3.5) | (3.1) | (233.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 15 | 1区3トレンチ | 木杭 | (47.0) | (4.9) | (4.0) | (454.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　材質不明<br>先端部焼成 |
| 16 | 1区3トレンチ | 木杭 | (26.0) | (3.3) | (4.0) | (191.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 17 | 1区3トレンチ | 木杭 | (48.1) | (5.2) | (5.4) | (649.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 18 | 1区3トレンチ | 木杭 | (38.7) | (3.3) | (2.2) | (202.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ<br>部分的に炭化 |
| 19 | 1区3トレンチ | 木杭 | (35.7) | (4.8) | (2.4) | (232.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 20 | 1区3トレンチ | 木杭 | (36.4) | (4.09 | (3.8) | (94.0) | かまぼこ | 判割　材質不明　先端部炭化 |
| 21 | 1区3トレンチ | 木杭 | (45.3) | (4.0) | (3.0) | (355.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 22 | 1区3トレンチ | 木杭 | (45.7) | (5.1) | (4.4) | (317.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ<br>板材の半端物か？ |
| 23 | 1区3トレンチ | 木杭 | (42.3) | (1.2) | (4.8) | (155.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 24 | 1区1トレンチ | 木杭 | (35.8) | (4.1) | (5.1) | (131.0) | 不整形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 25 | 1区3トレンチ | 木杭 | (31.6) | (4.1) | (2.2) | (217.0) | 長方形 | 板状 |
| 26 | 1区3トレンチ | 木杭 | (30.3) | (5.2) | (3.5) | (342.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 27 | 1区3トレンチ | 木杭 | (32.5) | (4.4) | (3.5) | (294.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 28 | 1区3トレンチ | 木杭 | (47.8) | (5.4) | (3.5) | (261.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 29 | 1区1トレンチ | 木杭 | (53.8) | (6.3) | (4.0) | (754.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 30 | 1区1トレンチ | 木杭 | (33.9) | (7.0) | (1.9) | (205.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 31 | 1区3トレンチ | 木杭 | (30.1) | (5.2) | (3.0) | (267.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 32 | 1区3トレンチ | 木杭 | (27.9) | (2.8) | (3.1) | (71.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 33 | 1区3トレンチ | 木杭 | (41.2) | (4.9) | (3.0) | (351.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 34 | 1区3トレンチ | 木杭 | (42.0) | (2.8) | (3.1) | (168.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 35 | 1区3トレンチ | 木杭 | (40.8) | (3.3) | (3.6) | (235.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 36 | 1区3トレンチ | 木杭 | (21.1) | (3.7) | (2.6) | (90.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 37 | 1区3トレンチ | 木杭 | (48.3) | (5.0) | (3.0) | (348.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 38 | 1区3トレンチ | 木杭 | (29.3) | (4.2) | (3.2) | (207.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 39 | 1区3トレンチ | 木杭 | (66.5) | (6.0) | (5.5) | (910.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 40 | 1区3トレンチ | 木杭 | (52.6) | (5.3) | (2.2) | (474.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 41 | 1区3トレンチ | 木杭 | (45.1) | (6.0) | (4.0) | (357.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 42 | 1区3トレンチ | 木杭 | (43.2) | (3.0) | (2.9) | (219.0) | 円形 | 丸木　材質不明 |
| 43 | 1区3トレンチ | 木杭 | 40.6 | 3.0 | 4.6 | 344.0 | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目<br>上下削ってある |
| 44 | 1区1トレンチ | 木杭 | (40.2) | (6.3) | (3.1) | (459.1) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 45 | 1区1トレンチ | 木杭 | (39.0) | (3.9) | (3.7) | (281.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 46 | 1区1トレンチ | 木杭 | (37.7) | (3.9) | (3.6) | (236.0) | 円形 | 丸木　サワラ |
| 47 | 1区1トレンチ | 木杭 | (29.4) | (5.6) | (2.9) | (237.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　板目 |
| 48 | 1区1トレンチ | 木杭 | (33.7) | (3.9) | (2.5) | (205.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 49 | 1区1トレンチ | 木杭 | (30.1) | (1.3) | (6.7) | (131.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 50 | 1区1トレンチ | 木杭 | (59.3) | (4.7) | (3.9) | (464.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　クリ？ |
| 51 | 1区1トレンチ | 木杭 | (46.3) | (4.4) | (4.8) | (429.0) | 方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 52 | 1区1トレンチ | 木杭 | (53.9) | (5.2) | (5.8) | (885.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 53 | 1区1トレンチ | 木杭 | (23.9) | (4.9) | (2.1) | (143.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 54 | 1区1トレンチ | 木杭 | (46.3) | (4.4) | (4.8) | (429.0) | 台形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　材質不明 |
| 55 | 1区1トレンチ | 木杭 | (25.7) | (6.0) | (2.7) | (203.0) | 長方形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ　柾目 |
| 56 | 1区1トレンチ | 木杭 | (64.6) | (6.3) | (4.5) | (829.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 57 | 1区1トレンチ | 木杭 | (55.8) | (5.1) | (4.4) | (554.0) | 三角形 | 打ち割り法によるみかん割り製材　サワラ |
| 58 | 4区 | 桶底板 | (22.8) | (11.2) | (0.8) | (114.0) | 長方形 | 2箇所、穿穴 |
| 59 | 2区 | 斎串？ | (34.3) | (2.5) | (1.1) | (66.0) | 長方形 | 金属器による調整痕 |
| 60 | 1区3トレンチ | 板状木器 | (12.5) | (4.8) | (0.5) | (14.0) | 長方形 | サワラ |
| 61 | 1区3トレンチ | 板状木器 | (20.5) | (7.2) | (0.5) | (34.0) | 長方形 | サワラ |
| 62 | 2区 | 樽栓 | 4.4 | 3.0 | 3.0 | (14.5) | 不明 | 材質不明 |

※木杭の重量は、含水した値である。また法量についてはすべて最大値である。

# 第Ⅴ章　総　　括

## 1　調査の成果と課題（杭を多用する水路について）

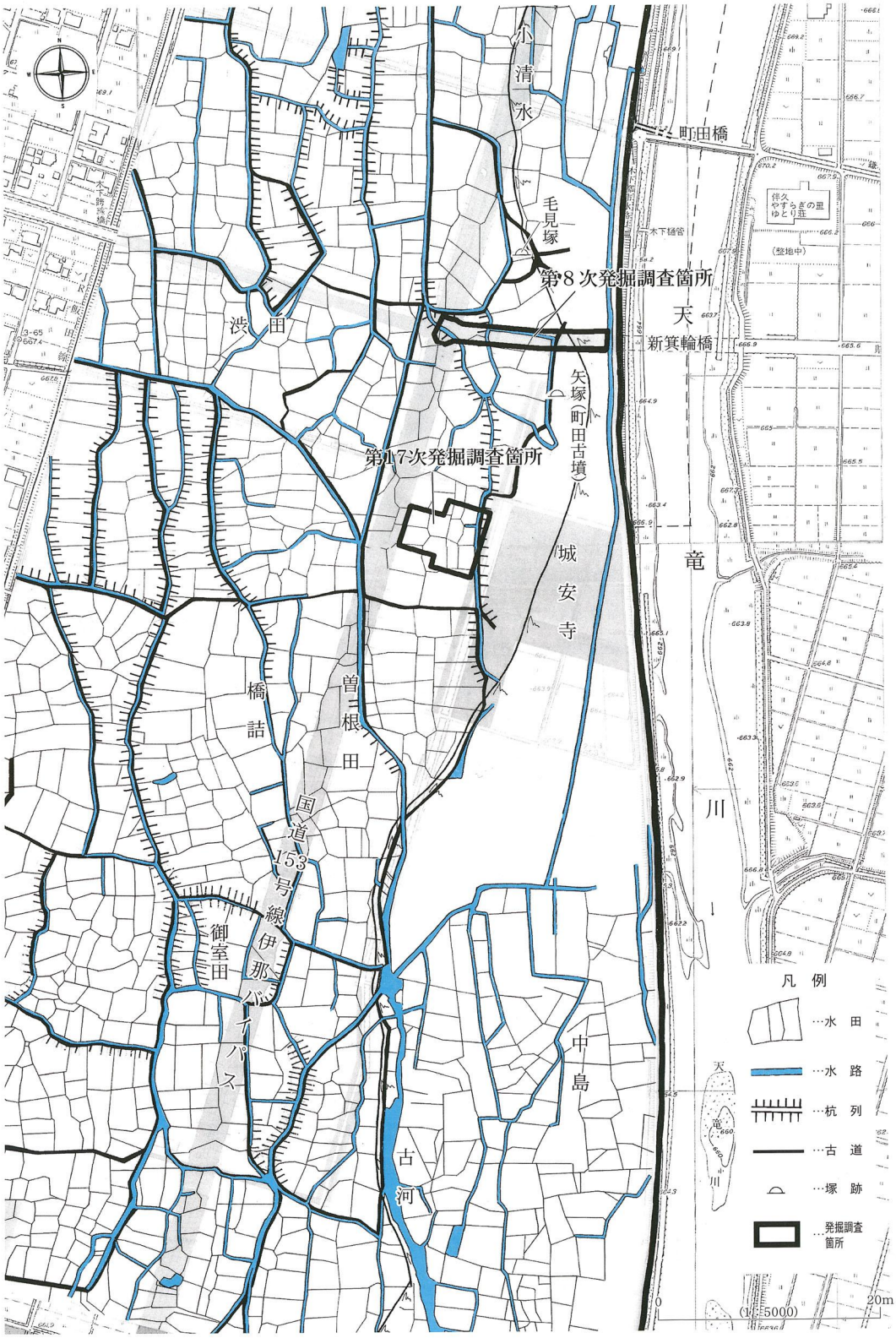
今回検出した杭を多用して構築する水路状遺構は、他に平成４年度実施の第８次調査と、同年に南箕輪村教育委員会実施の遺跡南部に当る久保下地区での検出事例がある。特に前者は、その規模や構造等の特徴に類似点が多いことを第、章でも触れており、また今回の調査地から北方200m程の比較的近くであることから、当初より１条の同じ水路ではないかと疑っていた。その答えは、昭和29年に作成された「箕輪遺跡平面図」（第24図）に記されていた。原図には、耕地整理以前の水田区画・水路・道路の様子が記され、それに出土した杭列や遺物の位置が落とされている。図に当該調査範囲と第８次調査範囲を重ねてみると、杭列を伴う水路の記載位置と、それぞれの両遺構検出位置がほぼ一致しており、やはり同じ１条の水路であることが判明した。また、水路の路線は、検出した水路が洪水で埋没し機能を果さなくなった後も改修を繰り返され、耕地整理以前まで変わっていなかったことも判った。このことは、１号水路状遺構の上部に重なる２号水路状遺構の検出により裏付けられた。

次に、遺構の構造と年代について若干触れておきたい。本遺跡は、杭を多用した水田址及び関連遺構を有する特異な性格がある。本遺構のように杭を密に打ち込んで構築することが、あくまでも路線を固定し流路を安定させるため、その路肩の強化を図る土留めの役割だけであるのであろうか。密に打ち込まれた杭の集合体そのものが面を形成し、護岸の役割を果していたのではなかろうか。しかし、サワラを主とする特定の木材を使用することは、それが構築された時代の社会情勢が関係していると思われる。それは、サワラ割材杭の使用の構築物は、これまでの調査と研究の成果から、ほぼ中世末から近世初頭段階における大規模な土木工事により成立した可能性が浮上してきた。今回同様に、杭を多用する水田及び関連遺構については、長野県埋蔵文化財センターが実施した国道153号線伊那バイパス関連の発掘調査においても数例を検出している。その調査報告の中で、中世以後の割材杭使用に関する解釈として、当時の伊那谷特産物で、当町でも江戸時代初期の年貢の一つであった「榑木（くれき）」と杭の関係について着目している。榑木は、建具や屋根板材を作る原材料で、その主たる原木がサワラであり、制作方法が杭の製作方法とほぼ一致する。その生産過程で排出された規格外の廃材利用ではないかと示唆している。また、その年代については、『榑木代米御訴訟に付代官様より御勘定江御書上之写』（1699　大出区所有）の記述の中に、「小笠原兵部少輔知行の時（1601～1613）箕輪領28か村が榑木材を伐採して現物で収めていたが、榑木材を伐りつくした他の理由で、脇坂淡路守支配の時に訴願して、寛永18年（1641）に代米納になった。」とあり、杭の生産される契機は榑木生産に関連していること。少なくとも代米納となる1641年以前ではないかと推考している。

なお、戦後の大規模な耕地区画整理が行われるごく近年まで、近隣の水田には杭を使用した、その基部が露出し水流にさらされていた水路が稼動していた。水田経営に対する杭の使用は、本地域ではごくあたりまえに代々伝統的に受け継がれてきてきたのであろう。

## 2　おわりに

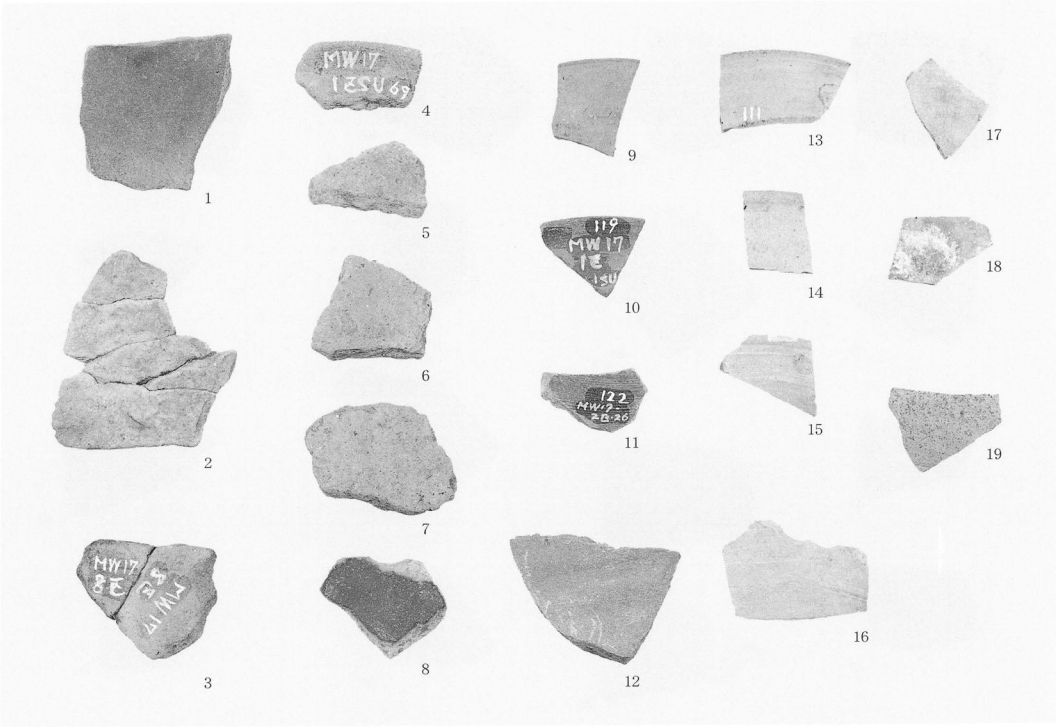
末筆になりましたが、調査の進行並びに本報告書の作成に際しまして、ご指導ご協力をいただいた各関係者の方々をはじめ、文化財保護に多大なご理解とご協力を賜わりました株式会社しまむら様に、本書の刊行を持ちまして厚く御礼申し上げます。



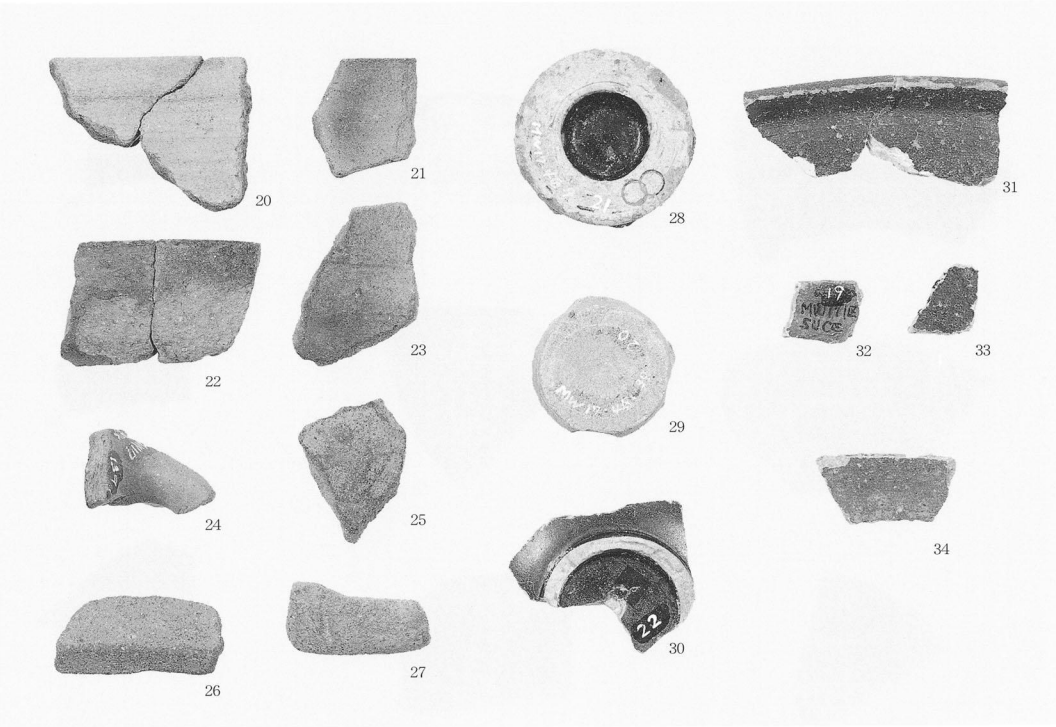

第24図　箕輪遺跡平面図（昭和29年度調整）

**参考文献　（著者名50音順）**

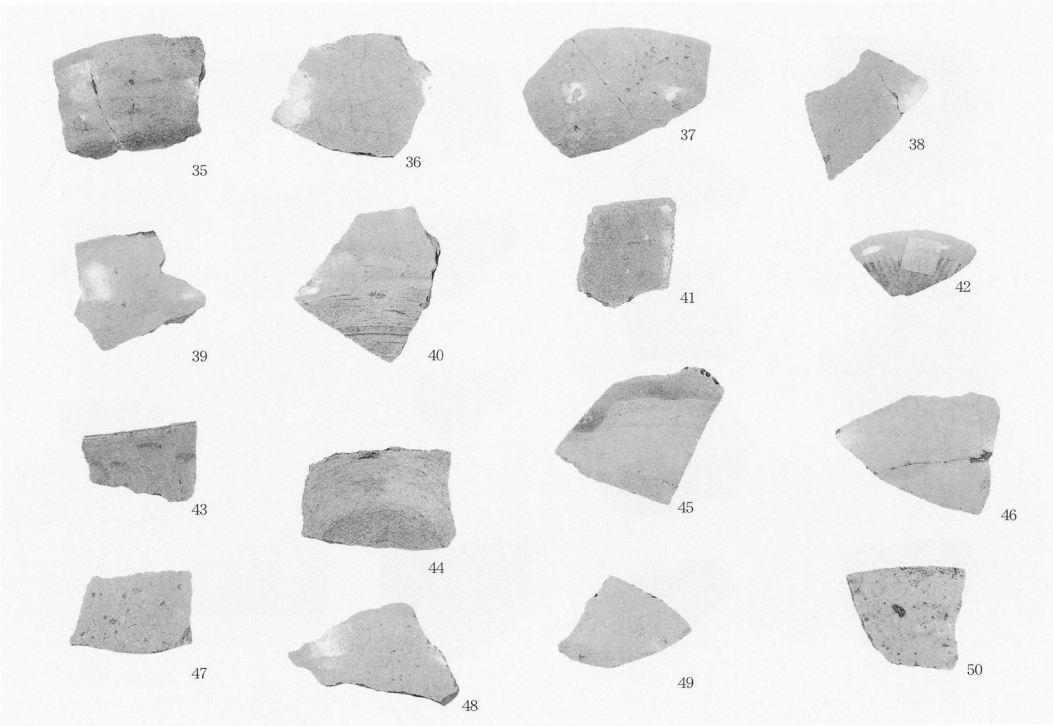

| | | |
|---|---|---|
| 市川脩三 | １９５４ | 「近世天竜川の治水　伊那郡松島村」『語りつぐ天竜川』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所 |
| 大場磐雄 | １９６４ | 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」『伊那路8―1』 |
| 木下区誌編纂委員会 | １９９９ | 「木下区誌」 |
| 小池修兵 | １９５８ | 「箕輪遺跡第3回の報告にかえて」『伊那路2－5』 |
| ㈶長野県埋蔵文化財センター | １９９７ | 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26更埴市内その５』 |
| ㈶長野県埋蔵文化財センター | １９９７ | 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15』長野市内その３ |
| ㈶長野県埋蔵文化財センター | ２００５ | 『国道153号伊那・松島バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』箕輪町内－箕輪遺跡－ |
| 信濃毎日新聞社 | １９８６ | 「ふるさと地理史5　伊那谷」 |
| 長野県教育委員会編 | | 「歴史の道調査報告書XXX天竜川」復刊者(社)長野県文化協会 |
| 長野県史刊行会 | １９８８ | 『長野県史考古資料編　全１巻（4）遺構・遺物』 |
| 藤沢宗平 | １９５５ | 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」『信濃第7巻2号』信濃郷土研究会 |
| 松島信幸 | １９９２ | 「伊那谷における活動的中央低地帯について」『研究紀要第3号－1992－』飯田市美術博物館 |
| 松島信幸　寺平宏 | １９９９ | 「伊那谷の地形面の編年と気候変動及び地盤運動との関連」『研究紀要第9号－1999－』飯田市美術博物館 |
| 松島信幸 | ２００１ | 「南アルプス北部、三峰川沿いの更新世後半（海洋酸素同位体ステージ6以降）の造地形史」『研究紀要第11号―2001－』飯田市美術博物館 |
| 箕輪町史編纂刊行委員会 | １９７６ | 「箕輪町史　自然編現代編」「箕輪町史歴史編」 |
| 箕輪史研究会 | １９５４ | 「第2回箕輪遺跡中間報告」『箕輪史資料集第3号』 |
| 箕輪町教育委員会 | １９７５ | 『木下猿樂遺跡』緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９７６ | 『木下南城遺跡』緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８０ | 『箕輪遺跡』調査第Ⅰ集 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８１ | 『上の林遺跡』第１次・第２次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８２ | 『箕輪遺跡』調査第Ⅲ集 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８２ | 『上の林遺跡』第３次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８３ | 『箕輪遺跡』調査第Ⅳ集 |
| 箕輪町教育委員会 | １９８６ | 『上の林遺跡』第４次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９９１ | 『箕輪遺跡』第５次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９９１ | 『箕輪遺跡』第６次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９９１ | 『箕輪遺跡』第7次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９９３ | 『上の林遺跡』第6次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | １９９７ | 『箕輪遺跡』第10次緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | ２００１ | 『上ノ平城跡』 |
| 箕輪町教育委員会 | ２００２ | 『福与城跡』平成12・13年度緊急発掘調査報告書 |
| 箕輪町教育委員会 | ２００５ | 『箕輪遺跡』第14・15次緊急発掘調査報告書 |
| 南箕輪村教育委員会 | １９９３ | 『箕輪遺跡』塩ノ井中田地区 |



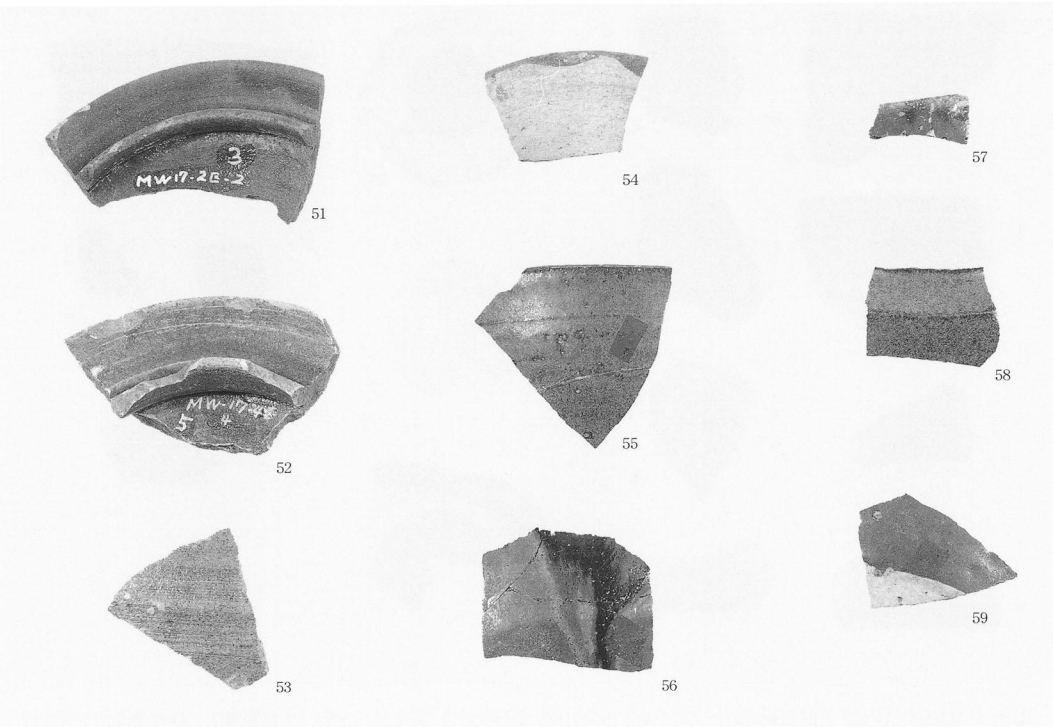

出土土器類１（弥生土器１～3，土師器４～８、須恵器９～12、灰釉陶器13～19）



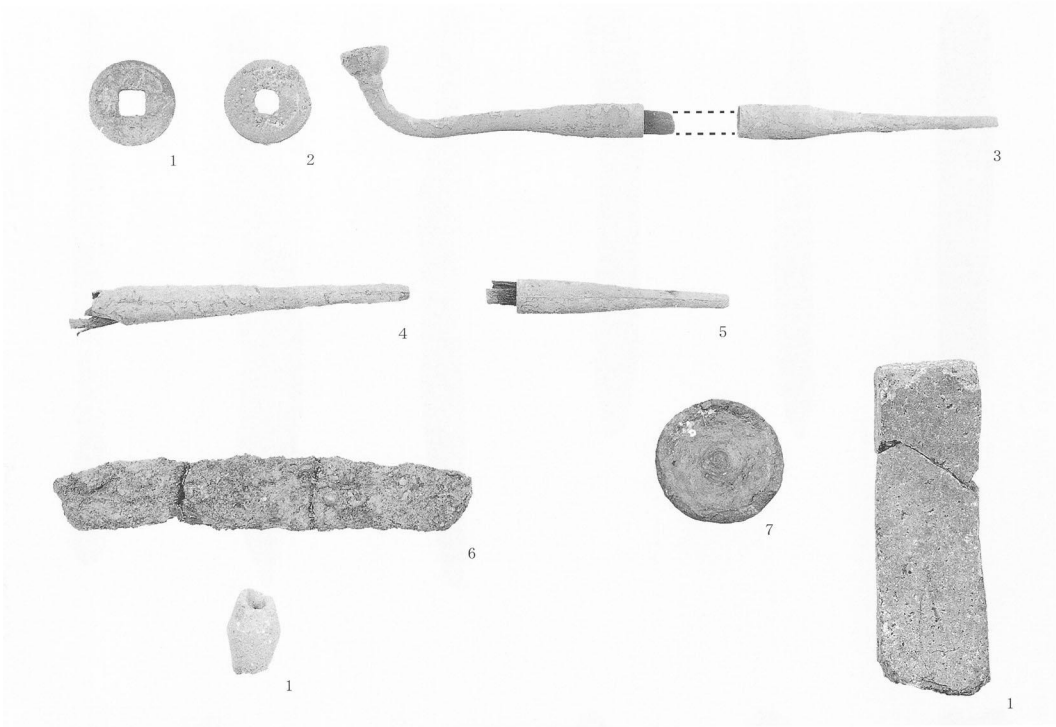

出土土器類２（内耳土器20～25、カワラケ26・27、黒釉天目茶碗28・29、鉄釉碗30、錆釉擂鉢31～34）




出土土器類３（瀬戸美濃灰釉碗35～42、灰釉皿43～49、志野鉢50）



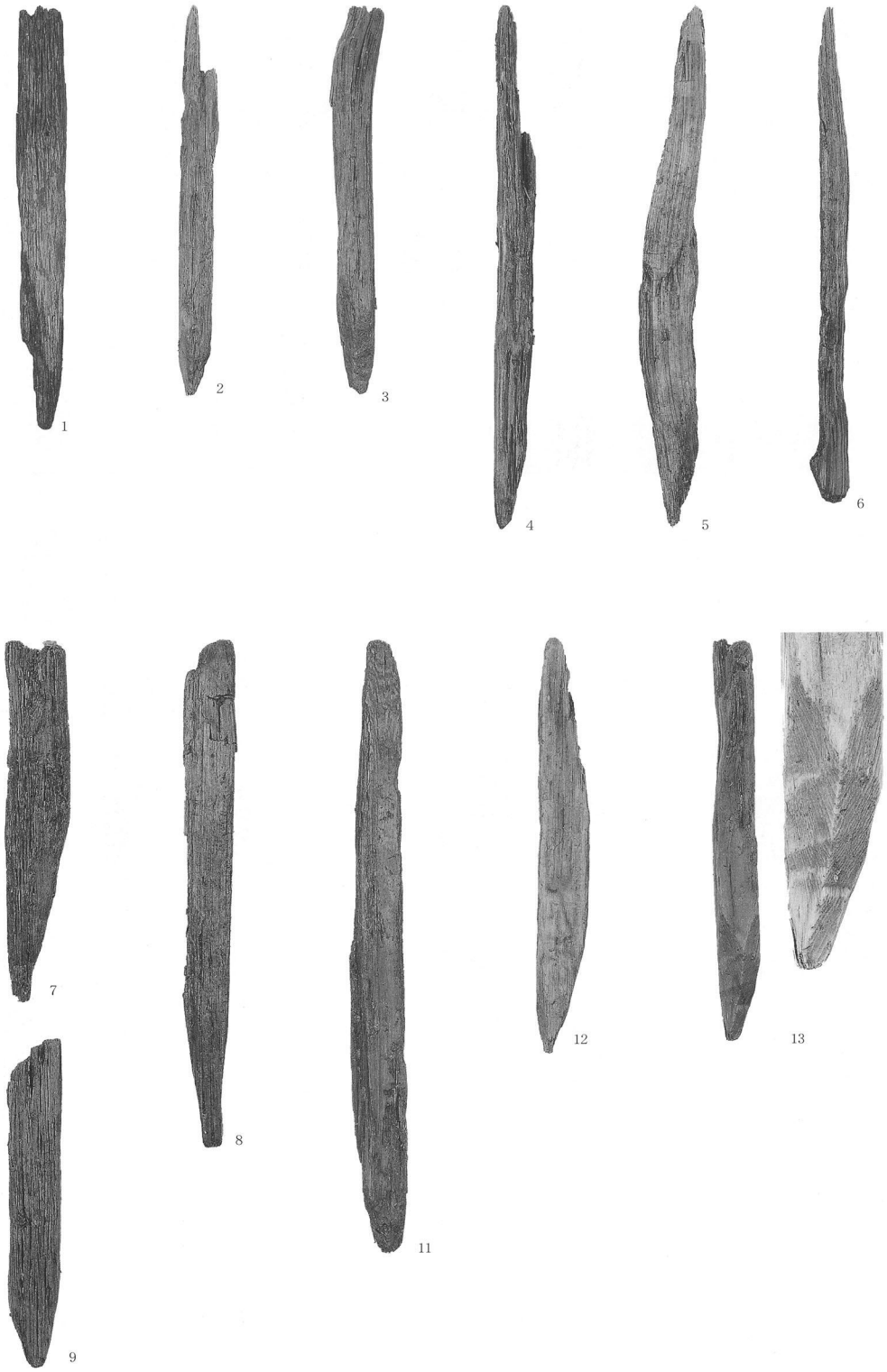

出土土器類４（鉄釉灯明皿51～53、鉄釉碗54～57、鉄釉茶壷58、天目茶碗？ 59）




出土金属器（銭貨１・２、煙管３～５、刀子6、コマ７）、石器（砥石１）、土製品（土錘１）

出土石果類（モモ核１～19、オニグルミ20）

図版 4




出土木器 1

出土木器２

出土木器 3

出土木器４

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | みのわいせき |
| 書名 | 箕輪遺跡 |
| 副書名 | 平成17年度ファッションセンターしまむら箕輪店新築工事に伴う<br>埋蔵文化財第17次緊急発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 著者名 | 赤松　茂・根橋とし子 |
| 編集機関 | 箕輪町教育委員会 |
| 所在地 | 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地　㈹TEL0265－79－3111 |
| 発行年月日 | 2006年3月17日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| みのわいせき<br>箕輪遺跡 | ながのけんかみいなぐん<br>長野県上伊那郡<br>みのわまちおおあざ<br>箕輪町大字三日町893番地1他 | 20383 | 98 | 35°<br>53′<br>26″ | 137°<br>59′<br>37″ | 2005.4.11<br>～<br>2005.8.5 | 3,622㎡ | 店舗建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 箕輪遺跡 | 水田址 | 中世～近世<br>近世～近代 | 水田面<br>水路状遺構<br>竪穴状遺構<br>農耕関連遺構<br>溝状遺構 | 木器<br>土師器<br>須恵器<br>陶・磁器<br>金属器<br>石果類(モモ・クルミ) | 本遺跡第14･15次緊急発掘調査において検出した、水路状遺構の継続状況を確認できた。第8次調査で検出した同遺構との関連性も想定される。 |

# 箕　輪　遺　跡

**平成17年度ファッションセンターしまむら箕輪店**
**新築工事に伴う埋蔵文化財第17次緊急発掘調査報告書**

平成18年３月 発 行

編集・発行　株 式 会 社 し ま む ら
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
箕 輪 町 教 育 委 員 会

印　　刷　龍 共 印 刷 株 式 会 社